

尾崎喜八資料

第 9 号

特集・尾崎喜八と串田孫一

車窓のフーガ(串田孫一君に)／尾崎喜八	2
駆鳥の失策／串田孫一	3
富士見からの手紙／串田孫一	4
古い日記を読みながら／串田孫一	8
娘への手紙(六)／尾崎實子	10
虹／尾崎喜八	12
小鳥の本／花の検索／串田孫一	13
富士見時代の「天気図リーフ」／尾崎喜八	16
解説／尾崎喜八	17
串田さんの山の文章／尾崎喜八	20
交友抄／無題(ノートより)／尾崎喜八	21
尾崎さんの山歩き／串田孫一	22
二十年前の春／串田孫一	23
尾崎喜八さんの山と詩／串田孫一	24
*	
尾崎喜八への旅・その三／伊藤海彦	26
*	
尾崎喜八・串田孫一 交流資料／嘉納忠明	29
*	
できごと／編集室から	32
*	
表紙題字／草野心平	

尾崎喜八研究会

1993年10月

車窓のフーガ

(串田孫一君に)



ウエストン祭の日、上高地・河童橋のたもとで一服する尾崎喜八
と串田孫一氏（1960年6月7日、伊藤和明氏・撮影）

疾走する列車の振動とリズムにつれて、
波のように旋回しながら
近づいてはまた遠く行き去る
玉虫いろの夏の自然と
真昼の山々の壮大なフーガよ！

たえず風景の変遷する車の窓に片肱ついて、
やがて三時間、君は私と対坐している。
それは安んじて見ることのできる三十何年の頃、
しかも今にしてなお新らしく
思わぬ発見に驚かされる人間の顔だ。

いかに愛すればとて、人はついに
他のたましいの暗い天には徹し得ない。
しかし互いに似かよい、転回し、逆行し、
或いはひろがり、或いはリズムを変えながら、
友情の長い一曲を織り上げてきた。

それは調和の技法にすぎなかつたろうか。
否、その対位法には異つた個性の鍊金があり、
誠実の造形と創造とがあった。
そしてその君と私とのたまたまの旅の車窓を、
今、人生と夏の眺めの壮大なフーガが飛ぶ。

古い文献や資料を探して、幾らか自分の勉強の骨組を作ろうと計画したことは私もあるが、何れも中途半端に終つた。尾崎喜八資料蒐集に熱心な嘉納忠明さんにお手に掛ることになり、少しはお役に立つかと思っていたが、何かひと言話し始めると、それは、と言いながら古い雑誌や新聞からの複寫を示され、更に成る程と思われる註釈まで加えられると、ただその熱意に呆れるばかりであった。その資料のうち、尾崎さんから、私には鋭く響く言葉に據つて指摘を受けた心得違いについては忘れる筈はないが、他の大部分は暫く読んでいるうちにやつと想い出し、中にはどうしても記憶を蘇らせることの出来ないものもあつた。

駝鳥の失策

串田孫一

これは一体どうしてなのか。

私は或る時期に、それまで箱に溜めてあつた切抜の中から、対談や座談會、それに書評の類を抜き出して破棄してしまつた。ついつい心にもないことを話したり書いたりした證據を永久に消滅させたためであった。これは正に「駝鳥の策略」であった。

だが今、それらが資料として發掘されてしまうと、私一人が恥じてばかりはいられない。近い将来、尾崎喜八の新しい研究のために役立つようになると願おう。

Litterae scriptae manent.

尾崎喜八と串田孫一

尾崎喜八資料九号の特集は、尾崎が昭和の初期から亡くなるまでの四十余年の間、愛情と信頼をもつて心を預けた友である串田孫一氏との交友を、尾崎側の文章と串田氏側の文章を選び出して表現した。

尾崎の書いたものの中で雑誌・新聞等に掲載

され、その後単行本に採録されたかった作品

をとり上げて編んできた従来の方針からはずれ、『尾崎喜八詩文集』にある「車窓のフーガ」「虹」「交友抄」等も載せたが、特集の意のある所を汲んで再読していただきたい。

前半の昭和二十五年、當時信州富士見の森の中の一軒家に流寓中の尾崎を串田氏が訪ねられた項は、尾崎にとって喜びと慰めと、富士見に於ける自分の仕事の確認と発奮とを与えた大事件であったので、妻實子の「娘への手紙」を特に交えてその状況の説明に代えた。そして串田氏の富士見訪問にいたる昭和二十四年からの尾崎の書簡は『名もなき季節』にも載せられているが、串田氏の随想も含まれている「アルプ」掲載分から採った。昭和二十五年は尾崎五十八歳、串田三十五歳である。この特集を編むに当つて串田孫一氏に一通り眼を通していただき掲載の許可をいただいた。どこかで読んだ記憶のあるものも特集として纏めてみると、新たな感懷をもつて見る事の出来る喜びを味わいつつ編集を行なつた。

（嘉納忠明、尾崎栄子・記）

富士見からの手紙

—昭和二十四・五年—

十数年前に、私が受け取ったいろいろの方からの手紙の束を整理した時、尾崎さんからのものを抜き出して別の束を作つた。それを今度もう一度調べてみると、内容をはつきり憶えているもので見当らないものが何通かあつて、それが気になり、紛れ込んでいそうなところを何日か探してみたが出て来ない。いつかは見附け出せると思うが、今間には合わなくなつた。現在手許にある一番古いものは、この昭和二十四年の五月のものであるが、

富士見から戴いたもので、これ以前のものが、

敬愛する串田さん。

東京はもうすつかり新緑の時で、今日あたり、青嵐をおもはせる風の中で燕がひるがへり、日光が暑いほどで、御すまゐの井の頭附近ではところどころの農家に鯉幟が揺れ、白と黒との爽やかな夏着をよそほつた小鳥のサンセウクヒが、「ヒリヒリン、ヒリヒリン」と鳴きながら、続のやうに輝く空を飛びます。生きているからである。尾崎さんに最初にお目にかかったのは中学時代で、秩父へ向かう汽車の中だったが、このことは最近、日本つて来ます。

山岳会の会報に書いた。それ以後、井荻の中西悟堂氏の家におられた時にも、亦そこから近くへ移られてからもお邪魔はしているが、手紙をはじめて戴いたのは恐らく昭和十三年のはじめだったと思う。その前年の暮に、私ははじめての本『乖離』が出て、それを郵送した時に、この本についての細々とした感想を、何枚もの便箋に書いて下さつた。この本では初見靖一という筆名を使つたが、尾崎さんはからのその郵便は、串田方もなく、その名前だけで届いたのが不思議でもあつたし嬉しくもあつた。だが、戦前、戦中に戴いた手紙はすべて焼失した。

同じ五月の風が私の富士見の高原にも、今日は朝から吹渡つてゐます。離れ島のやうな此の分水荘の森の中、樹々の障壁のために幾らか弱められて吹いて来るそよかぜの中で、ヒガラ、四十雀、カハラヒワ、黄ビタキ、コサメビタキ、センダイムシクヒ、サンセウクヒ、それに啄木鳥の仲間の赤グラやコグラまでも、求愛に、営巣に、採餌に、鳴啭に、それはそれは賑やかな事です。カラマツは緑の煙の程度、白樺はまだ新葉をさへ綻ばせませんが、蝶や小鳥や太陽や空や雲、すべて大地との接触を直接にしないものは、すでに皆春の姿を呈してゐます。

今日は此の半年あまりの間にいたいた御著書への御礼を申上げるつもりで此の手紙を始めたのですが、今私の前には「理性の微笑」から初まつて、つい此の聞いただいた「モンテエニュ素描」にいたるまでの七冊のあなたの御著書があります。これを七冊机の上に置いてあるのは、勿論仕事の暇に読みふゞけるには違ひありませんが、又一つには、私自身の怠け心に鞭を当てるためでもあります。全く此等の立派な仕事と其の多量さとには驚くのほかはありません。「苦惱と思索」から統いて「モンテエニュ旅日記」、すると忽ち「素描」が送られて来ましたが、其時はむしろアッケに取られた形でした。

「快樂と幻想」と「苦惱と思索」とは、謂はば車の両輪のやうなものと思ひますが、哲学者串田さんを知るには最も該切なものと申して宜しいでせう。それにあの愛らしくも美しい

い「幸福を求めて」を、私が或る冬の日の暖かい午前、森の風かげの日当たりにカモシカの毛皮を敷いて、釜無の山々を眼前にしながら読んだ思ひ出は永く忘れられません。少年のための「物思ふ」本を、誰があなたのやうに書く事が出来たでせう！ 私はあれを読みながら、もう一度子供の昔に返つて、生れて初めての経験としてあの本を手にしたいやうな氣になつたのでした。

たの御懇意の結果だつたのだなと思ひました
御親切をありがたく御礼申上げます。
好きな自然の中で静かに仕事をしてはゐて
も、生きる事がます／＼苦しくなる今日、遙
か東京の空に見えざる友愛の手があつて、援
助を与へてくれる事は本当に嬉しくもあれば
助けでもあります。昭森社も駄目らしく、海
彦君の社も中々の苦境のやうな折柄、私の小
舟は泊るべき港もなくて沖合を漂つてゐるや
うな有様です。何卒今後もよろしく御願ひ致
します。

松本市に私の読者の同好会とかいふものが
あつて、明朝早く招かれて出掛けますから、
今日は之で失礼します。奥様に宜しく御鳳声
下さい。

- 5 -

Mon cahier de la philosophie française
ところあなたの帳面の名は、そのまゝあなたの方の思索の森林と草原と水辺とを想はせます。清冽な甘美な水、温かく柔かい草、花の香にembaunéされた輝かしい空氣……。あなたがんがあなたの著書にはらへゆかしめに混じり込んでゐるやうです。

串田様

玉案下

五月二日 午後

差上げます。
尾崎喜八

尾崎さんは手紙の終りに、月日は勿論、時にその必要があれば時刻まで必ず書かれるが年は書いてない。消印がはつきりしていればそれで問題はないが、この手紙の消印はまだ

にその必要があれば時刻まで必ず書かれるが、年は書いてない。消印がはつきりしていればそれで問題はないが、この手紙の消印はつかず

れていてどうしても読めない。便箋と万年筆の工合から判断して、はじめは昭和二十五年のものと思っていたが、私自身の日記に、これを受け取ったことが書いてあつたために、二十四年であることが確められた。

その頃、井の頭、牟礼近辺は田園と言つて差支えないところが多く、想像された通りに鷓鴣が農家に立ち、飛来する小鳥の数も多かつた。私は翌年の六月末に富士見を訪れたが、その時、尾崎さんから、「東京各区間及び武藏野の鳥」として図鑑から拾い出して戴いたものが今も手許にある。それには八十六種の鳥の名前と、その声を聞き、あるいは目撃し得る季節が記されて、これは随分役に立つた。そういう武藏野を何かにつけて想い出された。そして富士見の自然の変化については、この後の手紙にも克明に書かれ、私もそういう環境が次第に羨しく思われるようになつた。

この手紙で尾崎さんは私の本についての感想を述べておられるが、私としては嬉しかつたばかりでなく、鼓舞されて、ともかく仕事にはげむ気持が一層ふくらんだのは事実である。それについては自分の日記にも書いてあるが、ここに改めて書くのは少々工合が悪い。

『塔』という雑誌は、昭和二十四年の一月に創刊号が出たのだろうか。発行所の羽田書店が親戚という関係で、大迫倫子さんが編輯の手伝いをしていた。私は大迫さんからの依頼で、二十三年の大晦日に、第三号の原稿として「私生児の都」という題のものを渡した。

出版社として、昭森社と「海彦君の社」が出て来るが、これは新月社のことと、伊藤海彦さんは、二十三年九月二十九日に入社が決定、宇佐見英治さんも同社におられたことだし、尾崎さんの本を出そうとしていたのは確かであるが、後に（昭和二十六年九月）角川文庫としてはじめて出版される『碧い遠方』の原稿が全部揃つっていたわけではない。

賀春

昭和二十五年元旦

御一家皆々様御機嫌よく御迎春の事と存じます。私共も高原一望の雪景色の中で新春の青い煙を上げてをります。

信州富士見高原

尾崎喜八

懇ろな御手紙を積雪の森の家でなつかしく読みました。事ある毎にさうやつて思ひ出して下さるあなたの渝る事なき友情にはたゞ感謝のほかはありません。貧しく生きてはおりましたが、あなたの友は御承知のやうな生活を

家が歩いて数分のところにあつたので、編輯上の相談にものっていたことから、富士見の尾崎さんの話も当然したに相異ない。だが尾崎さんが『塔』に何を書いて送られたかは記憶がない。今、大迫さんに電話をして訊ねてみると、題は憶えていないが、素晴らしい原稿を戴いて特別の組方にして掲載したそうである。

博物学をお始めとの事、全く同慶至極です。そして其のやうに身辺の事物から着手されるのこそ本当の研究態度だと確信します。私も今は冬の事なので、雪と植物の景観や、寒夜の天の星などを眺めたり観察したりしてゐます。そして例によつて中学生用のノートに“Cahier de la Nature,” の名をつけて備忘の記録を残してゐます。「詩人博物学者」といふ御指名は恐縮ですが、ラヂオの「愉快な仲間」なんかに出演（？）しないところが取柄であります。

御手紙による東京の十日のミヅレには八日九日と雨シラスの予告があつたやうですが、ここ富士見の高原も十日は午前六時半頃から細かい緻密な雪が降り出して昼前一杯つづきました。積雪量は九センチ、以前からのを加へて総積雪量二〇センチ。それに地面が一帯に凍上してるので、山靴などは全く見えなくなる位踏み込んでしまひます。此の雪の予兆としては七草の日以来の一〇二〇ミリバールといふ気圧がだんだんに下降して來た事と、水蒸気張力が大きくなつて來たこと、それに九日の朝からの巻雲、巻層雲が西寄りの雲向ではびこり出した事などがあります。そして昨日（十一日）は終日雲量〇といふ快晴、（富士、北アルプスの槍、穂高、常念、関東山脈の金峯山等もくつきりと白金の峯々をつら

昔ながらに履みつゞけて、年はとつても魂はいよいよ若く、大して酬いられもしない仕事を元気でやつてをりますから、其の限りではどうか安心して下さい。

ね)、今日は又朝の快晴から次第に雲が出現し、その量を増し、そして明日は恐らく又雪を降らせる事でせう。いづれにしても此のところ快晴と降水との日の到来に三日位の週期が定まつたやうです。新聞に出でる天気図を見ると其間の消息がよく分ります。宅では此の天気図のために読売新聞を入れさせてゐます。決してプロ野球の記事のためでも、○党嫌ひのためでもありません。

あなたが自然観察の記録をとつておいでの方は大賛成であります。「公教要理」の暗誦ではありませんが、「よろしい、お続けなさい」です。

「薔薇窓」には心から期待します。どうかそれが実現して、「直ぐつぶれ」もせず、「最高のもの」になる事を祈ります。中々困難の多い仕事でせうが、挫折しないで御骨折り下さい。

富士見へ御来遊の時は五月末が一番よいかと思ひます。白樺やハンノキの芽がほぐれ、落葉松の新緑が煙り、蓮華つゝじが真赤に咲き、此の森にすべての夏の小鳥達が揃つて囁りはじめる季節です。五月末から六月の中ば頃まで。これが一番富士見高原の美しく活気づいてゐる時ですから。

一度講演をしたのが機縁となつて、木曾駒山麓伊那町の男女の二つの高等学校に突然愛読者が出来、あの「高原暦日」が一週間ほどで五百部売れたさうです。そして其後もその生徒等は熱情を絶やさず、とうとう此の十四日にはもう一度出かけて「ベートーヴェン講

演」を試み、持つて行く筈の「ヴィオリン・コンチェルト」(Op. 六十一)を聴かせるつむりです。

東京には今を可愛い盛りの孫娘をり、(ロランの「コラ・ブルニヨン」のグローディーのやうな今年二つの子供です)私そつくりな気性の其の母親もて、頻りに東京へ帰れとすゝめて來るのですが、(時には泣いてすかしたり、怒つた顔を見せておどかしたり、父としての愛情を疑ふやうな事を言つたり)、一方信州に此のやうな日増しに強くなるほどしが出来ては、中々オイソレと此處を後にするわけにもゆきません。

いろいろまらぬ事を申上げましたが今日はこれで失礼します。末ながら御令闈様によろしく御鳳声のほど願ひ上げます。

一月十二日夜

信州富士見高原

尾崎喜八

ようになり、『雲と草原』などを読み返しているので、恐らくそういうことを書いたのだろうと思う。

天気の記録のつけ方について、この手紙から教えられ、また大きな刺戟を受けたのは勿論である。私も当時は天気図が載るので読売新聞をとり、それを切り取つてノートに貼つていたが、天気図をつくるようになったのは二年先である。これに関してはまた別に、尾崎さんからの興味ある手紙がある。

「薔薇窓」についても、私の方から報告をしたらしいが、この雑誌の計画は、かなりのところまで進められ、創刊号と二号との編輯もしてあつたが発刊されずに終わつた。私は資金のことでも、博報堂の雑誌部の人たちと何度もか会つて広告による収入の見とおしをつけたり、賛同してくれそうな人たちを訪ねた。

前年の十二月十八日、片瀬の吉村博次さんの家へ、伊藤海彦さん、矢内原伊作さんと私の四人が集まり、誌名を相談した。勿論、この四人は殆ど毎日のように連絡し合つて誰かと会つてゐたのであるが、誌名を決めるのは一日がかりだつた。持ち寄つたその候補は五十ばかりあつて、それを段々に減らし、最後に「エチュード」と「薔薇窓」とが残つた。それが二対二で中々決まらなかつたが、私が頑張つて「薔薇窓」で押し切つた形になつた。発行所も殆ど目あてがつたので、それを尾崎さんに知らせたのだろう。

(「アルプ」昭49・6)

古い日記を読みながら

一九五〇年六月二十八日

私は十何年振りかで中央線の下り列車に乗り。尾崎さんからの手紙で、朝九時（現在は九時三十分）に浅川を出る汽車が比較的空いていることを知つたのでそれに乗る。席がぼつぼつ残つていて。ジョルジュ・シムノンを読んでいた老人がいた。古い、何度もの山行を否応なしに思い出して、私は窓のへりにしがみついていた。それは浅川を出たばかりから始まつた。藤野へ来ると雨が降り出した。普通の旅行と、山旅とをどういう工合に区別していたかを忘れていた私は、この季節に当然雨にあうことを承知していながら傘を持つて来なかつた。

甲府に停車中、線路を隔てた上りのホームに、高校時代の友人F君が立つていて。何処へ行くのかと訊ねられ、信州富士見までちょっとと言つてから、彼の笑つている視線をそのだろうかと改めて考えはじめた。配給の食糧をうけ取るのに忙しい家族を置いて、勿論勝手な旅を楽しみに行くのではないとしたら、久しぶりに尾崎さんを訪ねることはどういう気持からなのか考へる。

それは訪ねてみなければ自分にも分らないが、戦後尾崎さんがしばらくおられた吉祥寺の河田楨さんのところで、富士見分水荘の住

所を知つてから、何度も文通があり、私自身二三年前から何といふこともなしに始めていた自然の勉強の先生から頂く手紙は、かつて眺め、かつて歩いた山や高原の容子を私の中に甦らせた。手を振つて、偶然出会つたF君と別れてからもそんなことを考えながら、私は自然の勉強に出かけるという気持が整つて來た。

線路添いの土手の花は、その時の私にとつて、ムシトリナデシコではなしにナデシコであり、テリハノイバラではなしにイバラでしかなかつたが、一つ一つの親しげな挨拶があつた。田圃の緑も美しかつた。長坂あたりから雨はいよいよ強くなつた。霧の中に山は全部かくれている。このあたりで見える八ヶ岳や甲斐駒がどんな位置にどんな姿でいたかも思い出せない。

富士見駅に下りたが、はげしい雨の中を歩き出す勇気がなく、駅の売店に頼んで番傘をかりた。傘はさしても、ズックの靴はすぐによ水を吸い込んでしまつたし、赤土の道に流れる雨水は飛び越しよもなかつた。白樺の赤松の森に入る。もう防ぎようもなく濡れてしまつたので、倒木に腰を下ろして休む。霧が流れれる度に白樺の幹が近よつたり遠のいたりする。草むらにイブキジャコウソウを見つけ、詩人と、私にとつてきつと記念すべきものになる再会のために、その花を摘んで手帖にはさんだ。

分水荘について、小走りに出て来られた尾崎さんはすいぶん瘦せておられた。

この日のこの時、挨拶が終つてから、私は高原滞在の時がはじまる。そして早速やつてきたのはキビタキだつた。それはもう途中の道でも声を聞いて來たが、雄雌のイチイにこの鳥はハナビシソウの花弁を胸につけたような衣裳を見せる。

クロツグミ、キセキレイ、サンショウクイ、シジユウカラ、カッコウ、コサメビタキ、エナガ……と私のノートには森の小鳥たちの名前が並ぶ。その日の夕方、目撃したり声だけを聴いたりしたものである。

夜食後、尾崎さんは原稿紙の入つた箱をかかえて来られ、「落葉搔きの時」「春の雲」「寂しさと桜草と」をよまれた。いずれも、後に『碧い遠方』のIに入つたものである。それから私の、小鳥たちへの高まりかけて來た関心によせて、ハドソンの『鳥と人』の中から、エナガのことが書いてある美しい一頁をよまれた。

*

その晩のことも、それに続く三日間のことでも、私にとつてはもう一度改めて書きなおすべき材料が沢山ある。拙い文章にしたもののがこれまでに何篇かはあるが、覚えた花や小鳥の名前で悦んで綴つたようなものが多い。それはいつかは訂正しなければならない箇所もあり、新しく、もつと別の要素を加えた上で書かねばならないものである。その材料は、殆んど自然の細かい生命に与えられた名称にすぎないが、恐らく私自身のその時の熱意の故に、いつまでたつても鮮かさを失わない。

鮮かさがそのままである限り、私自身が少しでも満足を感じるような文章にはなりがたいような気がする。

六月二十九日

朝、森を廻る。東北の森の生活が想い出されるが、こんなに鳥は鳴いていなかつたような気がする。雨が上つて水々しいが、陽は照り込んで来ない。

午前中、ゴム長でハイランドへ行く。尾崎さんは、私に勉強をさせるために、仕事はしばらく放棄された結果になる。

アカモズ、カワラヒワ、アマツバメ、イリヅバメ、コカワラヒワ、ホオジロ。モズがほかの小鳥のまねをして鳴く。朝は八ヶ岳の裾がいくらか見えていたが、雲は相変らず低い。入笠山の中腹に雲が一線に流れている。フランス・ジャムにそういう詩のあつたことを思い出す。Un nuage est une barre...

その日の夕方、夕食を頂いている時に急に空が明るくなり、虹が出た。この虹については、『碧い遠方』の中の「虹」に、私も「哲学者」となつて登場しながら、詳しく美しく、気象学上正確に書かれている。その終りの一節はこういう文章だった。
「それから時間にして約二十分、太陽の沈むにつれて荘麗な七彩の虹は次第にその脚の方から消えていったが、やがてラジオの小函から流れ出した諏訪根自子演奏のヘンデルのヴァイオリン協奏曲第四番、あの透明で生氣にみちた美しい田園風なラルゲットの中に、友人の哲学者も私も妻も、つい今しがたまで太陽と夏の雨とに築かれて立っていた平和の門のおもかげを、今度は靈妙な樂音の流れを介してもう一度其處に認めたのであった。」

ヤコグサ。
ハイランドから再び森へ戻つてウメバチソウ、イチヤクソウ、もう花の終つたベニバナイチヤクソウ。

その日の午後、私は持参した画帖をもつて、

雨の霧れ間を見て絵をかきに出た。色をつけようとするとまたひとしきり雨が強くなり、牛小屋に入つて白樺の林を描いた。それは私はにとって一種の休憩時間だった。戻ると、療養所の若い方々が三人遊びに来ていた。私は、尾崎さんの註文でジャムの詩を読む。『明の鐘から暮の鐘まで』の中の L'eau coule...（水が流れる…）をよむ。正式に、人の前で声を出してフランス語をよむことも久し振りだった。

その日の夕方、夕食を頂いている時に急に空が明るくなり、虹が出た。この虹については、『碧い遠方』の中の「虹」に、私も「哲学者」となつて登場しながら、詳しく美しく、気象学上正確に書かれている。その終りの一節はこういう文章だった。
「それから時間にして約二十分、太陽の沈むにつれて荘麗な七彩の虹は次第にその脚の方から消えていったが、やがてラジオの小函から流れ出した諏訪根自子演奏のヘンデルのヴァイオリン協奏曲第四番、あの透明で生氣にみちた美しい田園風なラルゲットの中に、友人の哲学者も私も妻も、つい今しがたまで太陽と夏の雨とに築かれて立っていた平和の門のおもかげを、今度は靈妙な樂音の流れを介してもう一度其處に認めたのであった。」

六月三十日

こうしたことのあつた森の夜は独特的の静かさがあった。そしてヨタカの声を黙つて長いこと聴いていた。

幸にして薄陽のあたる日が来たので私は釜無の谷へ案内をされた。ズボンの裾をノルウェー・バンドでとめ、お弁当を持って出かけ、階段状断層の複雑な丘と谷を越して武智鉱泉へ出る。鳥はムクドリ、ヒクイナ、モンシロチョウやウスモンシロチョウ、ヒメシロチョウ、ヤマキチョウが飛ぶ。ナキイナゴが草むらから飛びのく。その草むらはコウゾリナ、ヒメジオン、カワラマツバ、ユウスゲ、コガク、サラシナショウマ。

釜無の谷を少し溯ると、遠くの村に鳴ぐヒグランのようなエゾハルゼミが、この山の梅雨の終りを告げている。ヒオドシチョウ、コムラサキ、アカタテハ、テングチョウ、クヂヤクチヨウ、ヒヨウモンチョウ、アサマンジミ。今日の蝶たちは長い雨を伏ていた後の悦びがあった。ミヤマハンミョウがきらつと光る。

クサノオウ、フジアザミ、ヒシアザミ、カワラハハコ、カワラニガナ、カワラニンジン、コマツナギ。私たちは堆石岩と石灰石とが同時に見られるガレのところから引返した。

河原の洲で中食をした。ボタンキョウを水につけ、尾崎さんは新しいハンカチを平たい石の上に敷いて食卓を作る。空の彩雲が貝がらを見るようだ。ジュウイチやコチドリが鳴

いて通る。

歩き出すとオオルリが鳴いた。テリハノイバラ、トリアシショウマ、クサフジを見て、

河原を机（落合）へ渡る。またそこでしばら

く記録したものは、シメクサ、ママコノシリヌグイ、オトコヨモギ、ムシトリナデシコ、アキカラマツ、キリンソウ、イブキジャコウソウ。ヨシキリが鳴く。ミドリシジミ、ミヅイロオナガシジミ、ヒメウラナミジャノメ、ウラギンヒヨウモン。カワトンボの雌。

療養所を訪ねる。回診のあと入浴して、回復期をゆつたりと物思わしげに楽しんでいるように見える患者たちが羨しい。

*

そしてその翌日、アカゲラが白樺にとまっている朝の森から東京へ帰った。トリアシショウマとエイザンスマレとアカバナとサクラソウとノコギリソウを持つて。これらの植物は武蔵野の私の家の庭に根をおろした。

これが私の最初の富士見訪問だった。この初夏の高原の四日間があつて、私の自然の勉強は一つの方向を見つけたようだ。

尾崎さんの作品について書くことのいよいよむつかしくなった私は、古い日記帳を開いて、ぼんやりし続けていた。

（「歴程」昭34・3 尾崎喜八特集より。先行図書『博物誌IV』（現代教養文庫）昭25 社会思想社）

娘への手紙 (六)

○ 尾崎實子

二十五年の七月の手紙の束を手にした時に、一番上に重っていた葉書に串田さんが午前十時の汽車で帰られたという字面が目に入つたので、おや？と思いついてみると「ジェ

ジエがまごちやん大喜び大満足で帰られたよ」と云いながら自分もニコニコ満足顔でお別れ際の出来事の話をしてくれた事が書いてあつた。それで六月末の手紙を出して見ると串田さんが見えた時のことがこれも葉書で知られている。その総まとめが、七月に入つてから尾崎がウェストン祭のために上高地へ出かけた留守に長々と次に書き写す手紙となつた訳である。

（中略）

二十四年、二十五年は特にお金がなくつて困る事の多い年だった。これから先がどうなつていくか、と私は私なりに考えずにはいらなかつた。そういう時に串田さんにお逢いして色々とお話し合いしたことが、精神的にも物質的にも、先々の事に明るい希望が持てるようになつたのである。

この時分からの事を考えめぐらすと、尾崎の歩いて来た道には、いつも串田さんが陰に日向にと目を向けていてチャンスを与えて下さつていたのである。東京へ戻ることになつたのは、娘達の大努力のお陰だったが、同じ事をくり返すが、この二十五年に串田さんが、

富士見へ訪ねて下さつたということは、尾崎の心境に大きな変化と前進する原動力を与えて下さつたのである。

今も尚、私ども家族のことを遠くから見守つて下さつている形だが、実は私どもは本当に身近かにいて守つていて下さつているのだと思つていて、いつもいつも感謝の心を忘れてはいないのである。

二十五年七月十一日

（手紙の部分前略）

この間ハガキでもお知らせしましたが、串田孫一さんがお訪ね下さつた時の私ども二人の喜びと、訪ねて下さつた串田さんも大変なお喜びようでした。楽しく有意義な毎日でした。

六月二十八日、雨の中を串田さんが勇躍して来られました。この雨ではどうかしらと思つて二人で外を眺めていたところでした。ジエジエの喜びようは大変でした。その日は気温が降つて寒い感じの日でしたので炬燄に火を入れて丁度心持よい暖かさでした。このお客様、少しはゆっくりしていられると言つて下さつたので、喜びがもう一段と深くなりました。何しろお客様は急熱（尾崎家の言葉で）何かに対して急に熱情的に心を沸きたたせたり、一つ事に夢中になる時に使う）になつて来られたらしいの、お話を伺つていて私はほほえまざにはいられませんでした。

ジエジエと釜無川へ行かれ、あの川へハタキヨウの赤く熟したのをつけて置いて食べ

たら歯にしみるほど冷たくなつていてほんと
うにおいしかつたと楽しそうに串田さんがバ
ッパーに報告して下さったのよ。ジェジエは、
ミチヤンコが「アカナイ」（もう歩けない）
と坐り込んでしまった道を通つて来たのであ
の時のこと思い出してなつかしかつたよ。孫
ちゃんにあの時のコロちゃんのこと話してあ
げたんだよって云つていられました。何しろ
二人とも何をするのも、見るのも見せるのに
も、ほんとに楽しそうでしたよ。串田さん
(私は敬意を表して串田さんとお呼びいたし、
主人はマゴちゃんと申して居りましたからそ
のまま使わせていただきます)は一分間も大
事にして画を描いたり、一人で散歩したりし
てこの富士見を味わつていられました。

夜は私も交じえて下さって、笛(ブロック
・フレーテ)のお稽古や、焼け残っていたあ
の暁星小学校で使つて來た唱歌の本(フラン
ス語の)あれをだして來て三人で歌いました。
バッペア十か十一ぐらいの時、弟が習つて來
たのを一緒に歌つて覚えたものでしよう。串
田さんを思いもかけない古い時代の思いにひ
たらせてしまいました。私もなつかしい思い
にひたり込みました。さて七月一日の日おな
ごり惜しみながらお帰りになるので、ジェジ
エは駅まで送つて行かれ、串田さんのために
中山さんに交渉して双眼鏡を譲つていただき
たという事件があつたのよ。それは前の晩に
高橋(達郎)さんが見えて四方山の話をして
いたとき、串田さんがここへ見えてひどく双
眼鏡の必要を感じられて欲しくなられた話を

されたのです。そしたら高橋さんが前に中山
さんが二つとか三つ持つていらるが、その
中の一つが少しガタガタするのがあるが、誰
か欲しい人があつたら譲つてもいいと云つて
られたことを思い出し話をされたので、それ
では詳しいこと聞いて知らせましょうと云う
ことになつてたのですってよ。このことをジ
エジエが早速に中山さんに話をして本当に譲
りたいがあるのかと聞かれたら、譲つてもいい
といわれ、では今お金を持ってはいられない
だろうが品物を今渡して上げて下さるかと云
われたら、喜んでお譲りするということに話
がきまり、ジェジエ嬉しくなつて駅で切符を
買つていられる串田さんのところに駆けてい
きお話をしたら、飛び上らんばかりに喜ばれた
とのこと、その双眼鏡は本皮のケースに入つ
ていて修理に千円ぐらいはかかるらしいので
三千円で譲つて貰うことになつたのですって。
串田さん東京へ帰られてから、星を見たり
色々と楽しい思いと時間を過していられるそ
うです。

こちらでは、串田さんがジェジエの気持
をほんとによく解つて下さるし、何と云つても
話すことがそのまま直かに通じるので、とて
も楽しく豊かな日を過ごすことが出来たよう
で、私は嬉しくてたまりません。二人とも
満足しています。

串田さんはジェジエと一緒に富士見村付近
を歩いていて、どこへ行つても親しみのこも
つた挨拶を受けるのを見られ、すっかり感動
してしまわれたのですって。ジェジエに東京

へ帰つて来て貰いたいと思って来られたのだ
そうです。ジェジエが帰つて来て呉れたらど
んなに力強く思う人がいるかわからない、自
分なんか第一番に思つている者だが、ここで
の生活を見たら何も云えなくなつてしまつた。
どっちがいいのかわからなくなつたと云つて
いられました。串田さんは東京で随分いろいろ
の人と知り合いになられ、又交きあいもさ
れていたらしいのです。そしていろいろ
と心に染まぬ空氣を味わつていられるようで
す。その中で御自分がしっかりしたお仕事と
生活を打ち建てて行こうと今は一生懸命なの
だと云われてました。こういう時に、ジェジ
エが東京に居て呉れたら、どんなに心強く嬉
しく思うかわからないと繰り返し云つていら
れました。

それに此度わざわざ来て下さったのにはも
う一つ訳があつたのです。それは角川書店と
云う出版社でジェジエのものを出したいとの
事で、串田さんに尾崎の意向を聞いて欲しい
と依頼したそうです。「山の絵本」も出させ
てくれとの事。ほんとに私どもにとつてはな
んという朗報でしょう。

串田さんとこういう風にして御一緒に過し
たことはジェジエの心に新しい風が吹き込ま
れたようです。ジェジエはこの心の感動を決
して一時の燃え上りでなく何かの形になさる
ことでしょう。

私は串田さんの骨身を惜しまぬ御厚意に、
心より感謝しています。その暖かなお心は、
私達をこんなにも和やかな心持と、何かに向

つて燃える気持にさせて下さり、そう云う自分が幸せ者だと思つています。もう一つには串田さんが色々と話をして下さった今の世の中のことや、それにそつてシェジエの行く末の事についても誠に暖かなお心で考えて下さつて云われたお言葉を私は心の中に大事に納めて置き、これから何かする時には計画のもとにして行こうと思っています。

(中略)

今、おかしい話を思い出したから。

この間、シェジエが、「俺に金がないとは全く残念な事だよ。もしあったら、栄子達に二千円、コロチャンに五百円を汽車賃だと云つて送つて呼びよせ一緒に上高地へ遊びにつれて行くのがね。それから中山さんを一寸呼んで一杯やれるし、高橋さんは肉を二貫匁買つて思う存分食べさせてあげられるし、白崎さんは沢山お小遣いをあげて、マゴちゃん(串田さん)には画の本を買ってあげる、どうだい、いいだらう」と、まるでこれからその事を実行する前のような顔を(晴々とした満足そうな)して云われるので、大笑いでしまいました。時々こんな夢のような話を考案して一人で悦に入つてられるのよ。では又ね、これから買物へ駆へ。さよなら。

(「アルプ」昭51・8)

編集部注 ジェジエは喜八、バッパアは實子、ミチャンコ・コロチャンは孫美砂子の事、美砂子の幼児語である。

○ 尾崎喜八
虹

東京から友人の哲学者K君がたずねてきて、四日ばかりのんびりと遊んで行つた。そして学校ではモンティニュやパスカルを講義しているこの若い学者が、私という「孤独の散歩者」のところでは、高原の涼しい夏草の中にすわつてルソーやゲーテの話をしたり、折からいたるところの藪で真赤に熟れている木苺をつんで食べたり、山や雲や白樺の樹を写生したり、望遠鏡で星をのぞいたり、花や小鳥の名を覚えたりして、さてのうの屋前、元気に東京へ帰つていった。

ちょうどその二日日のことだったが、朝から午後までしとしと降り続いていた雨が夕方になると西のほうから止んで、もう雲の切れ遠い塩尻峠のあたりから、七月の花やかな夕日の光がみなみと射してきた。すると今までぼんやりと灰ばんだ緑に煙つていた高原の風景が一斉に歌い出すように生気にみちて輝きはじめたが、やがて見る見るうちに素晴らしく鮮明な虹のアーチが、東南東の丘の上、まだ雨脚に曇つているほの暗い紫陽花いろの空を背景に、巨大な半円を描いて噴き上がつた。

一本の虹がその外側から紅、橙、黄、緑、青、藍、堇色という順序に並んだ色彩の帯であることは誰でも知つてゐる。ところがこの場合の虹は一本だけではなくて、この色彩の

順序を繰り返しながら連続的に内側へ並んだいわゆる「過剰虹」を、じつに三本も伴つているのである。おまけにしつとり濡れた花のようないの天の懸橋の上には、空間を十度か十二度ぐらい離れて、もう一本比較的のうすい別の虹が、ぐるりと同心円を描いて夢のように浮かんでいた。この方はいちばん外側が黄色、いちばん内側が紅というように色彩の配列順序が前のとはちょうど逆になつて、気象光学上「第二次虹」と呼ばれている虹である。そしてこれら三本の過剰虹といい、第二次虹といい、これほど鮮明でよく揃つて完璧な虹の景色は、人間の一生の内でもそう度々は見ることができないのである。カメラや絵具函をさげて Rainbow-hunting(虹の採集)に鶴の目鷹の目のアマチュアでも、そう始終運がよくこんな見事な対象に出会えるかどうかは頗る疑わしい。

英國のショージ・オーボーン・クラークという気象学者のうつした写真に、これと同じような条件を備えた虹を撮影した傑作があつてよく気象関係の本に好個の虹の標本として載つてゐる。英國スコットランドのアバーディーンあたりの景色らしく、煙突の見える市街の一部と広々とした丘陵地帯とを背景に、高い見事な虹のアーチがその右半分を見せている。そしてそのアーチの下に、遠く横たわつてゐる暗くどっしりとした層積雲らしい雲の堤がひどく印象的である。それにも私はとしてはこんな珍らしい看物を我が家の座敷から手に取るように眺めながら、あいにくフ

イルムを持ち合わせなかつた悲しきは、ただ手を束ねて感歎してゐる外は無かつた。

それから時間にして約二十分、太陽の沈むにつれて壯麗な七彩の虹は次第にその脚の方から消えていったが、やがてラジオの小函から流れ出した諏訪根自子演奏のヘンデルのヴァイオリン協奏曲第四番、あの透明で色彩と生氣とにみちた美しい田園風なラルゲットの中に、友人の哲学者も私も妻も、つい今しがたまで高原の夕日と夏の雨とに築かれて立つていた平和の門のおもかげを、今度は靈妙な樂音の流れを介してもう一度そこに認めたのであつた。（一九五〇年 串田孫一君に）

（『尾崎喜八詩文集 6』）

○ 串田孫一 小鳥の本

この夏の初めに、十何年振りで会ふ詩人を高原の森に訪ねた。乱層雲が低く垂れ込んで、雨が降つてゐた。草の深い小径をぼつりぱつり歩きながら、久し振りに白樺の肌を撫でた。

四日の滞在中、半分は雨が降つた。降り続く雨ではなく、そのあひ間には、私たちは双眼鏡を首にさげて、ウツボグサが一面に咲いてゐる森の中を鳥の声を求めて歩き、草原の切株に腰をおろして、繖房状に開いた淡紅色のシモツケを、拡大鏡でのぞいたりした。森の家の窓の前には、雌雄二本のイチキの木が小暗く枝をはつてゐて、そこへ、美しい

小鳥が次々と小虫をさがしに來た。餌をさがしてゐるのではあらうが、窓からずつとみてゐると、子を連れたキセキレイや、あのカリ

・オルニア・ボビイの花弁を胸につけたやうなキビタキなどは、淡い夕暮の明るみを惜んで、ただ何となく遊んでゐる様子だつた。イチキの木から少し離れたシヤクナゲの大きな株には、シジユウカラ、クロツグミ、コサメビタキなどが、二、三羽づつやつて來た。

それから、黒と白と、どこかに赤紫を一笔入れた丸っこいエナガも來た。

それらの鳥の啼声に耳を澄まして、殆んど身うじきも出来なくなつてゐる私の前には、何種類もの野鳥図譜や、サンダースの本「A Bird Book for the Pocket by Edmund Sandars」小マムの本「Bird craft by Edmund Osgood Wright」それからハーナスには珍しい鳥好きの、ドーランの本「Pourquoi les oiseaux chantent par Jacques Delamain」などが積み重ねられて行つた。

私たちがそのエナガを見た晩に、ハドソンの『鳥と人』「Birds and Man」を書棚からとり出した詩人は、私をそれで、このエナガの出て来る二頁ほどのところを一緒に読んだ。まだその可憐な映像が全くはつきりと残つてゐる Long-tailed tit は、今度は英國の小川の、ネコヤナギの小枝に来て遊んでゐるのである。私はそのすばらしい觀察と表現に、一種のわななきを感じながら、小鳥の姿に見入つてゐるハドソンのことを想ふと同時に、それを、又淋しく森の生活を樂んでゐる詩人

とともに、からして額を近よせて讀んでゐる自己的ことも考へないわけには行かなかつた。

それほどせはしくない生活をしてゐる訳ではないが、ただ書評のための讀書や、友人たちはと話を合せるために新刊を殆んど感激もなく読んだりすることが多くなつてゐる私が、同じ一冊の本を一緒に声さへ出してよんでもることを、この上ない暖いもてなしとして悦んでゐる氣持が、詩人には必ず分つてもらへたらう。そして又英國でない日本では、この森にすむ詩人のやうな清らかな、静かな生活がどれほど苦しいものかを私も分つてゐるつもりである。

（『展望』昭25・10）

○ 串田孫一 花の検索

この千米突に近い高原の森は、私の自然の勉強にとって、もう到底忘れる事の出来ない場所となつた。私はここを最初に訪れたのは二年前の初夏であつた。雨に濡れた私は、斜めに薄く霧の流れて行く白樺の林を眺めてゐた。水溜りの沢山に出来てゐる高原の赤土道を、森の方へと小径を曲ると、草が深くなつて、私は濡れるがままに策のほどこしやうもなくなつてしまつた。霧は濃く薄く、一ときは鮮かに浮き上る白緑の白樺の梢を流れてゐた。そのたびに、木々の一部分が、私の方へ近附いて来るやうに見え、後ずさりをするやうにも見えた。そのあひだの、一面に水づい

た芝地に群生するウツボグサ。蓮華躰躅はもう花が少かつた。

帽子のない髪の毛から零が垂れる。私は草むらに分け入つて、なかば苔に蔽はれた大きな切株を見附けてそこに腰を落つけた。ひとりの風物全体も、立ちこめてゐる乱層雲も霧も、心持黄ばんで明るくなつて來たやうな気がする。

そのためなのかどうなのか、森から小鳥の声が聞こえる。寒蟬に似た黄鸝の囀りである。静かな自然と、麗しい花の姿と、そして何か分らぬものと、あまり遠いために、私のものと他人のものとも分らなくなつてしまつた想ひ出と、それにまつはる私の不当な想像とが、心を重くし始める。そして訳をさぐりたくもない気持の乱れがそれに続く。更にそれに続いて、一つの罪に似た負担も生れ、一切のものがそれとは関係なく遠のいて行かうとすると、私は自分一人に向つて苛酷なものを集めてしまふより仕方がないと思ふ。

小鳥の声が止むと、それを合図にまた雨が強く降り出す。私は立ち上つて森へ入つて行つた。この森に、十年振りに訪ねる『碧い遠方』の詩人がある。私はもう一度この小径に立ちどまり、この詩人が始めて森の山荘へ移つて行く姿を想つた。

「旅行鞄をさげて汽車をおり、改札口に身を乗り出して迎へる娘とかたみに両手を握りあひ、万感胸にせまれば却つて頓には言葉もなく、いそいそと行く我子のあとに老いたる父

親らしく随つて、停車場前のもひさな町の坂をくだり、坂をのぼり、蓮華躰躅の咲く丘から郭公の遠音の震む山手のほうへと、今日から我が生を托すべき見知らぬすみかへ、風薰る高原の道をたどる私であつた。

過去は茫々、未来は漠々。ただこの現前の恩寵に私はすがる。それにしても何たる大空、何たる日光、ゆるやかに高まつて末は残雪の山々となる何たる裾野の広がりだらう。」

*

私は同じこの小径を雨に濡れて訪ねる者に過ぎなかつた。重い心を棄て去れば、我が身のうちに甦へる単純な童心に、その時の自分が戸迷ふものに過ぎなかつた。

少年の頃の私は山の懷に育ち、岩棲にまたがつてただ歓喜の歌を繰り返してゐた。そしてその歌の疲れることもなかつた私が、何故か人間のさまざま的心情に動かされ出した。自然との乖離を不幸にして知つてしまつた私は、人間の心情の中に再びみたび乖離を感じ、育つよりも傷つき、成長するよりも歪みの重ねられて行くのを、知つて知らぬ振りをしてゐなければならなかつた。私は今なほ、人の世間に、何を求める、何を探し当つてようとしてゐるのだらうか。だが人間の眼ざしの中には偽りを隠す雲ばかりがある訳ではない。その慎みと真摯とが、清浄な輝きとなつて、人々のあひだに交はされてゐることを、私は知らないと言つてしまふことは出来ない。しかし

私は、どれほど強靭な力があればよいのだらう。私はそれに向つて立ち上る勇氣もなく、ただ卑劣だとも思へるその臆心を、私のさきやかな芸術のうちに組み入れて、それが何とか姿を変へくれるのを期待するばかりである。そしてもう、その虚飾のかげに、必ず偽りを宿さない限り、自分のどんな芸術をも創り出せないとは、思へば何といふ悲惨なことだらう。

*

私は再び自然を愛することを始める。人間の愛とは遠い愛をもつて、しかもそれが結局は人間としての愛を高めるやうな愛をもつて、もう一度自然を愛することを始めようとした。高原の詩人は、小鳥の声を教へ、花を教へ、蝶を教へ、雲と星を教へ、そしてそれらのすべてから、なほ何ものかを教へた。その最も大切な何ものかを、私はいつになつたらばはつきりと、鮮かな虹を見るやうに見届けることが出来るだらう。

*

私の自然の勉強は遅々としてゐる。しかし

あせる必要は何もない。昨日は夕暮の雲の色とその変化を記録し、今日は花の雄蕊の数をかぞへ、明日は一匹の虫の誕生を見るといふ風にして。

晩春の今、この森は、まだ桜の花がやつと散り始め、森の下草のあひだからは、まだ賑かに花の咲き出すには早かつたが、水松の枝では二匹の黄鸝が、オレンヂ色の胸を明くる光らせ、アカゲラの声も響いてゐる。

*

老詩人は急に思ひ立つたやうに、小雨の降

歩いてゐて、ばつたり巡り合へば、ふつと想
ひ出せさうな氣もする。

この当然の見方を、うつかり忘れることもな
いだらう。

高原の雨は降り続き、霧が赤松の梢にかか
つて流れである。

(『愛の彷徨』昭27・11 創文社)

る森の中を小走りにかけて、二輪の花をつけた小枝をとつて来て、私の前に『植物図鑑』と、『日本樹木総検索表』と、紫の打紐のついた拡大鏡とを揃へて持つて来る。私はそのにこやかな微笑のうちに、優しく、しかも厳格な博物学者の、愛情のあふれた試験官の風貌を見た。風の音もなく、ただ小鳥の歌の遠く近く聞こえてゐる森の家中で、私のための試験が始まる。一緒に行つた若い友が、不安な面もちになつて、それでも微笑は消さずに、細かい雨に濡れたその花と、私の顔を見くらべることも、私にはよく分つてゐる。

もし、この試験が全然出来なかつたら、私はどうしようか。毎日勉強と観察の努力がどれほど足りないかが証明されることになるのだらうか。私は段々に緊張の度が高まつて来るのが分る。しかし、そんなことではない。ナチュラリストとしてのこの詩人は、ただこの花の名を教へてしまへば、そのまま私が忘れることを気遣つて、かうして図鑑類を出し、この私の滞在に、一つの優美な思ひ出を残させるために、この試験を行つてゐる。

だが試験は試験だ。しかも参考書類が与へられてゐる試験だ。あつさりと匙を投げ出してしまふ訳には行かない。それにこの植物、あるひはこれに近いものを私は知つてゐる筈である。この花もかうして図鑑や拡大鏡が揃つて出されてゐるから、どぎまぎしてその名を想ひ出せないのかも知れない。一人山径を

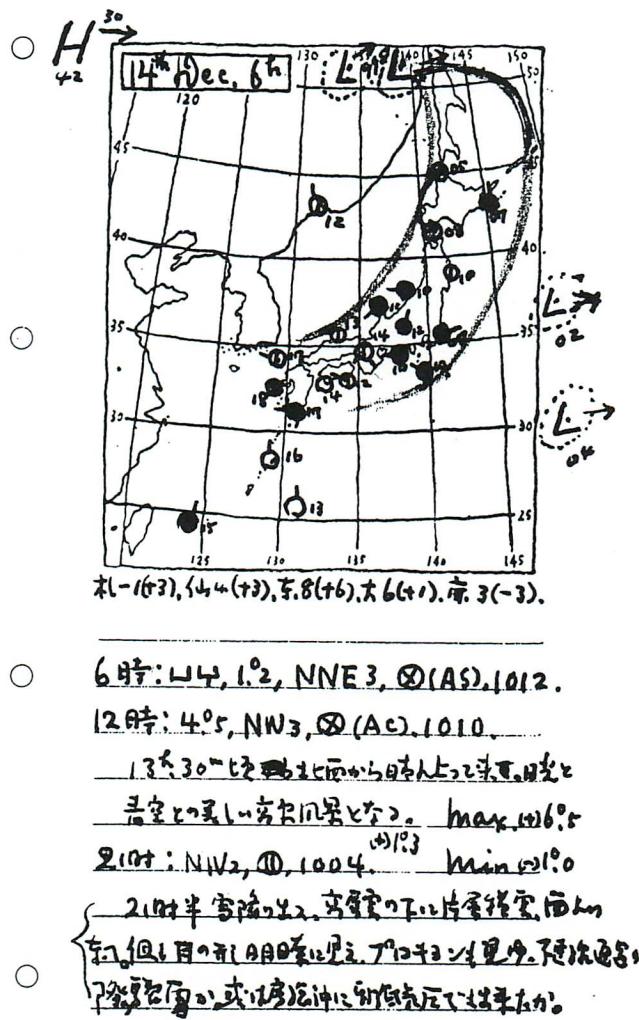
富士見の松目を訪れる途中、スケッチする串田孫一氏。この日の松目行きについては十六ページの解説を参照のこと(一九五一年十二月十四日、尾崎喜八・撮影)



私は図鑑をくり始める。漫然とではなく、スピカヅラ科のところを開く。あせらずに落着いて、この科の最初から見て行かう。きばなうつき、うこんうつき、……たにうつき。たにうつきの一変種にはべにうつきといふのがあつて、多分、アンドレ・ジイドの『狭き門』に出て来るウェイジュリアはこれだらう。しかし、今それを想ひ出しても喋ることを慎まなければならぬ。一頁めくる。さうだ、「うぐひすかぐら」だ。

だがここで、拡大鏡やもう一つの検索表が何故持ち出されてゐるかを考へなければならぬ。「やまうぐひすかぐら」の方へ移つて行く。それは葉の両面に毛が生えてゐるからだ。更に枝にも毛があるので、「みやまうぐひすかぐら」へ移る。そこまで辿つて来た私には救ひの手がさしのべられる。そして『検索表』によつて、『図鑑』には出でてゐない「けみやまうぐひすかぐら」が見当る。若し私がひとりでこれを調べてゐたら、恐らく「みやまうぐひすかぐら」でとどまり、むしろそれとの微妙な相違を発見しながらも、『図鑑』を信じてその限界を忘れ、植物の方を無理にそれに合せるやうなことをしたに違ひない。

私はもうこの植物を忘れるやうなことはないだらう。そしてどんな僅かな違ひが見附かつても、その時には自然の方をこそ信すべき、



富士見時代の「天気図リーフ」(尾崎喜八・記、串田孫一・デザイン)

上図は、串田氏が自らデザインし、印刷させた「天気図リーフ」を使用して、尾崎が作成した1951年12月14日の天気図である。串田氏からこれを送られた尾崎は、「毎日午前六時のラヂオから書きとつて記入してあますが、私の天気、風向、気圧、それに高気圧(H)と低気圧(L)の所在だけを書き込むことに(今のところは)極めてあます。そして図面の華麗さを得るために、晴は白、曇は赤、雨は青、雪は緑、霧は丸の中に赤点といふ色彩を用ひてあます。測候所は富士見を入れて、目下は二十二ヶ所を採つてあます」と、串田氏宛の私信で述べている(「アルプ」昭和49年8月号掲載)。「リーフ」のほとんどには、裏面に日記風なメモが記載されている。12月14日の裏面には以下のようない文がある。

○早朝東京から串田君来る。「新女苑」の一行ではなく、同君の“図書新聞”への原稿材料を探るためにであつた。午前から正午すぎまで松目部落河角家で、巖君、いさ子さん、名取文恵さんと会合して、三人から青年団活動について色々の話をきく、楽しかった。三人及び河角主婦とお婆さん等を撮影する。帰途串田君と栗生近くまで行き、立戻って帰宅。その間寒冷前線後面の晴れて行く雲景を眺める事が出来た。

○串田君今夜は一泊、明朝8時36分で帰京の予定。夜九時半頃から雪降り出し、Regen Philosoph の威力を發揮して来たと言つて笑ふ。此の前に北原(弟)君と同行して来た時もやはり帰りは雪になった。Schnee Philo と窓へてもよさうだといふ事になる。

解説

校正刷を送られて今度の此の本を読んでゐると、串田さんもいよいよその本領を見せて来たといふ気が私にはする。

もちろん、既に自身の年齢の数よりも多い著書を世に送つた彼の事だから、永い間それらの本に親しんで来たわれわれとしては、彼の哲学者・文学者としての物の見方や心の動かし方について、他人との接触の仕方について、処生の態度について、その気質や性癖のおほよそについて、過去の追憶の一端や未来への夢想の片鱗について、種々の文学・美術音楽に対する親疎や好惡のニューアンスについて、彼自身としても打ち込んだり指を染めたりしてゐるそれらの芸術への志向のおぼろげな輪郭について、又これは彼のやうな仕事にたゞさはつてゐる人の間では特に珍らしい事であるが、自然現象や生物などに対する愛について、すべて何時の間にか、かなり詳細に、串田さん其人から知らされてゐるやうな気がしてゐる。なぜかと言へば、彼の書く物はその殆んど悉くが隨想とか日記文学とか言はれる部類に近く、われわれはあたかも「アミエルの日記」に向つた時のやうな感じを其処から受けるのだから。

そして今つひに此の本だ。そして此の本で串田さんはいちばん最近の彼自身を語つてゐるのである。

或る見方からすれば此の本は一つのNature Book だとも言へる。串田さんの住み又歩く

庭に野に高原に山に、星や雲や鳥や花や虫たちが登場して、彼に語り、彼に教へ、彼のために歌つたり彼と共に遊んだりしながら、常にその喜ばしく楽しい伴侶となつてゐるからである。そこで今もしも私が此の本を「自然の本」だと広言したとしても、当の串田さんは決して迷惑を感じないばかりか、世間から其のとほりに受け取られる事をむしろ願はしないと思ふかも知れない。といふ理由は、彼の今日では尚つましやかな面映ゆい望みなるものが、実にさういふ本を書く事にあるのを私はよく察してゐるからである。

彼はギルバート・ホワイトの、リチャード・ジエッフリーズの、鳥のハドソンの私淑者であり、又現代ではジャック・ドゥラマンや

ヘンリー・ウイリアムスンらの本の愛読者である。彼は常に何處からかさういふ本や図鑑の類を探し出して買つて来る。オーデュボンのアメリカ大鳥類図譜などはその博物に捧げられた書棚の太陽であらう。そして私などよりも遙かに寛容な彼は、其種の本の随分いかがはしい日本語訳をも無いよりは増しだと思つて許し、警戒はしながら身になる処だけは喜んで攝取するのである。寿岳さんの夫妻の良心的な見事な訳書を私と共に推称して描かない彼が、かうして私が二度と読むまいと思つて投げ出すやうな悪訳の本をもふびんがつて助けるのである。このごろよく詩を書い

てる串田さんは、しかし詩人と言はれるよりもやはりナチュラリスト（博物愛好家）と言はれるはうが好きかも知れない。これからの永い一生をいろいろ勉強して、自然の不思議の中へ其の美や真をさぐりつつ入つて行く。此の本を読んでゐると既にその最初の探險に踏みこんでゐる串田さんの姿がじつに楽しげだ。その眼がじつに柔かい。それに彼は画がかかる。しかも素人の域を脱してゐる。彼について私の羨む唯一のものである。

私は昨日或る山の湖水の水ぎはで、水葵の薄紫の花と、その花びらにとまつてゐる一羽の美しい糸とんぼとを見た。私はこの花と虫とに集中された湖上の夏を、玉のやうな一篇の文章に書く力はあると自信してゐる。しかし画は？ その至福の散文詩を飾るべき画にいたつては望みがない。

串田さんは恵まれてゐる。彼は翼のある幸福を抱いてゐる。思ふさまその翼を試みるがいい。串田さんの或日の幸福が確かなものであるならば、たとひそれが如何ほど小さくあらうともさういふものが在るといふ事の実証はわれわれをもまた鼓舞するのである。何も其の翼をしまつて置くことはない。「虫がついてぼろぼろになつてしまはないやうにナフタリンをかけて置く」必要なほどおそらく無い。なるほど彼は内省的で慎みぶかい。彼は人に兼ね、世に兼ね、おのれにさへも氣兼ねする。しかも、自然の中に身を置くや人も羨む淨福を形づくる。それでいいのではないだらうか。貰つてもなんでも其の翼ある幸福が彼

のものならば、それを飛ばせて光の輪を描かせる事こそ持つ者彼の務めではないだらうか。思ふところあつてさう眩かずにはるられない串田さんに、私のこんな言葉は甚だ心無しな粗野なものに響くかも知れない。しかし此の楽しい本にもかかはらず、巻中たまたま洩れて来る疑ひやためらひの声を聞くにつけても、私は彼の耳もとに口をつけ、その肩に手を置いて、さう言はざるを得ないのである。

*
信州和田峠附近かと思はれる處で、山頂の黄揚羽や降り道での山雀夫婦に邪魔者扱ひされしよげ返つた串田さんが、しょんぼりとした氣持で山麓の部落へ入つて行く時の文章がある。蝶や小鳥が人間に對して或る習性をもつて臨んだ場合に、こちらがそれをどう受け取るかの問題であるが、此の場合ではナチュラリスト串田さんの影が薄れて、自然界での彼等の自由と優越とのはうへ重心をかけるのあまり、自分の対等の地位を低く見てゐる。又その入つて行つた部落で、農村の人々からは常に或種の立派な徳を学ばせて貰ひながら、自分のほうからは何も返礼する物がないといふ、所謂都會の知識人の農山漁村の人々に対する劣等感の告白がある。そして其の部落から出る最後のバスに乗らうとしながら、手拭を持つた大勢の人達と同車するのを「弱つた事になつた」と思つて、不思議さうに見送る村娘をあとに四里の道を汽車の駅まで歩いて行くといふ場面がある。

この氣おくれ、この劣等感、この苦渋の気

持は、串田さんがあつておそらく本当のものであり、又一面では彼の内心の矜持や自信の対極をなすものであらうが、さうした氣持を特にみづから取り上げて一つの文章の主要テーマとするところには、(そして此種のテーマや筆触をわれわれは巻中しばしば発見するのだが)、心理的にも、また作文的にも、私にはなんだか其処に、串田的方法のマンネリズムがあるやうでいくらか気になるのである。しかしこれとは反対に、夕日の風景のなかを走る近畿電鉄急行車のうしろの席で、「この太陽の光、壇に詰めておけたらしくぶんないでせうね。いつも持つてて、悲しくなつたら顔に振りかけるの。さうしたらほんたうにいでせうね」と、若い女の声がもう一人の若い相手に言つてゐるのを串田さんが聴くところがある。そして其後の伊勢路の旅のところどころで、日なたの憩ひの場所を見つけるたびごとに其の陽光の壇詰のことが思ひ出されて、今頃あの幸福な二人が何処にどうしてゐるだらうとぼんやり考へたといふのである。

これは串田さんの人間に對する、わけても女性に對する思ひやりや優しい氣持の、一つの本当の現れであらう。そして此の本の中に、女性や子供や小動物に對する彼のいくつしみの感情は、たまたまの周囲の索漠や苦悶の中、砂浜の桜貝のやうに歌つてゐる。しかし私としては、此の場合私だつたら、どうも此の悲しい時に顔へ振りかけるのに「すいぶんいい」だらう壇詰の太陽云々の言葉は、

そのまますなほには貰ひかねる。私だつたら却つてそこに或る浅薄さや甘つたるさを反射的に感じて、厭な言葉を聞くものだと耳を被ひたくなるに違ひない。それは趣味の問題だと言つてしまへばそれまでだが、然しもしもその声が若くもなく「大層可愛らしく」もなく、年増女か何かのげすばつた声だつたら、いくら言葉の内容が同じであつても、「頬に遊ぶ光」として、これほどの好意や夢想を我が串田さんに湧起せしめたかどうかは些か疑はしい。

此の本は一面正に生活良識の本であり、中年思索者の美しい瞑想と詩情との本でもあるが、そのさりげない寓話的性格のなかに、往往認識のバランスの狂ひの感じられるのがいくらか惜しまれる気がする。

しかし著者に對して同情ある心としては、その一つ一つが書かれた時の種々の条件をも考慮に入れて物を言はなくてはならないだらう。

*

「愛の撻」といふ題を持つ文章の中に「男女の友情は可能ですか、不可能ですかと問はれると、返答をする前にこの頃では何といふこともなくむつとする」といふ一句がある。内に勃然として憤りを感じるといふのであらう。目に見えるやうな状景であると共に、これは注目すべき告白だとしなければならない。

一体串田さんは此の数年来、いつのまか放送其の他で世の若い奥さんたちや青年男女の、人生行路の相談相手や指導者のやうな役

を演じさせられてゐる。彼といふ人をよく知つてゐるつもりの私は、此の役割がなかなか適任のやうに思はれもする一方、又時にはずゐぶん不愉快な思ひを味ははされる事も無いではあるまいと想像してゐた。だからたまたま雑誌や放送の座談会などで、至つて簡単に、まるで其の場の思ひつきのやうに、「植物採集の楽しさや望遠鏡でのぞく星の美しさの事でなく!」男女間の友情の可能か不可能かといふやうな質問を出されたら、経験の初めのうちならばとにかく、「此の頃」では、さういふ質問を発する当の青年のステューピッドな顔つきや、浅薄な口調などから、「何といふこともなくむつとする」といふのは、かなり複雑な心理として私にもよく解るし、そんな時の串田さんのさすがに苦がりきつた表情は、たゞヘテレビュイジョンでなくとも充分に鮮明な像として脳裏にゑがき得るのである。総じて串田さんといふ人は、此の本一冊を読んだだけでも解るやうに、或る一見なんでもないやうな事物でも、叩いたり撫でたり裏返したり、繼目をしらべたり、匂を嗅いだり舐めてみたりして、念入りな吟味や反省をしてみないと氣の済まない人である。彼は何についても断定とか結論とかいふものを下さないし、又おそらくさういふものが必要ともしてゐないのである。寧ろ生きることの意義は、彼にあつては、現象や事柄を手取りばやく解釈したり呑みこんだり定義づけたりしようとはしない、柔かく手落ちのない吟味の、いよいよ細かく、いよいよ賢くなりまさる其の過程

の中にあるやうに思はれる。したがつて「翼のある幸福」の終りの處でわれわれの読む、「私は或る時期に、人々を幸福に導くための努力が可能だと思つてゐた。だがさう言ふ心構へを打切らなければならぬ時が来た。私は教へる人ではなかつた。そればかりでなく、訊ねられ、訴へられて答へることの出来る人でもなかつた。自分の愛をそこへ向けることは、私には不向きだつたのである」といふ痛切な、いくぶんデスペラリットな告白もある。

書評などの場合でも同じで、頼むはうはどう勘違ひしてゐるか知らないが、本人としては些かの興味も覚えず心にも染まない新刊を持ちこまれて、厭々ながら引き受けたるやうな時がある。さういふ時の彼が、しばしばペッシュミストの唇を噛んでゐる様は想像に難くない。

串田さんはしてゐる。孤独。独りである事。しかしそれは姿の孤独ではなくて心の孤独だと彼は言ふ。「私たちが他人の心をたよるのも誤りではないと思へばこそ、私には、たよつてなほそこに、よろめきを予め用心する自分の中へだけは連れ戻すことの出来る用意を持つ身構へだと思ふ。かうして自分が内部の生活にかへつて行くことによつて、つまりは秘かに孤独になることによつて、明日に踏み出す一步を、狂ひのない、激刺としたものにするだらう。孤独とは、凡そ感傷からは遠いものである」ともまた。そして此の事は「次に迎へるべきものの価値を二倍にも三倍にもなし得る人間の智慧の技巧」としての逡巡や羞恥を説いた「ためらひ」の一章にも照応する思想である。

これだけ考へ且つ書いて、さて私はひそかに思ふのだが、世間は串田さんといふものを其の氣質のほのぐらい奥底や、其の志向の思はざる地平線では理解してゐず、単に一箇の円熟した若い思索家として、その哲学を実用的に駆使する事の容易にできる学者として、また青年男女の當面の問題に答へ得る指導者として、いささか安手に取り扱つてゐるのであるまいか。串田さんは、本当はもつともづかしい人なのである。彼自身遙かに問題に満ち、その渦巻の中にあるのである。しかもさういふ串田さんが、あいふ役割をきつぱり断り切れないところにその苦悶もあれば憂鬱もあるのではないだらうか。

そして其の意味でまた此の本は、一箇の柔軟微妙な魂の、美しい告白の書とも言へるのである。

昭和二十九年九月一日信州富士見高原にて

(串田孫一著『幸福をめぐる断想』)

昭29・10・20 三笠書房)

①—尾崎喜八

串田さんの山の文章

隨想集の今度の本では「若き日の山」、「山のパンセ」、「山の絵日記」の既刊三冊が骨子

になるよう聽いている。しかし私などから考えるとよくも続くものだと思われるような、忙しい多角的な活動の何處にすきを見出すのか、こんな瞬間に予想外の山へ出かけていける串田さんのことだから、新規の材料は後から後からと落石かなれのよう積もつていいことだろう。そしてそれらの火成岩や堆積岩や、殊には見どころの多い變成岩の破片の中から幾つかのものが選び出されて、ある物は鎌で割ったままのむきだしの石理を愛せられ、又ある物はその隠れた本質にカーボランダムの研磨をうけて、静かに晶々と光をはなつことだろう。

生活の他の部分に関してもそうだが、串田さんはあれほど山を愛して山へ行きながら、口では自分の山行の体験や山登りについての感想などをほとんど語らない。だから最近のように彼の山の著書が続々と出るのを見て、そんな人だったのかと今更のように目をみは

る人々の少くないのも当然であろう。彼は一般に生活の私事を語らない。心酔にしろ嫌惡にしろ、自分の感情を他人に押しつけない。交遊の間、時にいくらか張り合いのないのを覚えることがあるとしても、それが彼のモラールであり、仕方であり、又実に彼の美点の一つでもあるのだから是非もない。そのかわり相手が目に見えぬ公衆であり、読者である場合、彼は文字を介して大いに語る。堰の切られた水のように、弓を得たヴァイオリンのよう。大いに、しかし彼自身の節度にしたがって。

そして、もしも彼の私事なり関心事なりがその口づから語られることがあるとすれば、それはすでに彼がどこかに書いたか、或は公表を目的に現に書いているかする話題であろう。彼には不用意な言葉がなく、吟味を経ない表現もない。科学者のように理性的で、モラリストとしておのれ自身にきびしいのである。それに彼がまた職として文人でもあるとすれば、事前にそうやすやすと自分の手のうちを曝らして見せることはしないであろう。秘密は芸術家の資源である。初心者だけが覚えたことをすぐ教えたがるのである。

串田さんの山の文章は、人生や自然界を題材にした他のエッセイなどと同様に獨得の滋味を持っている。この滋味は、「食っているうちには味が出る」という諺以上に、味わい馴れるといよいよ深く甘美に思われて来るので、一度これに心醉してしまうと、もう別の人間の文章などは受けつけさせない程の魅力

をそなえている。たえず物を識ろうとする欲求が旺盛で、理解が深く柔かに行きとどき、攝取されたあらゆる知識が血肉となつて彼を養い、その生活の内と外とを時々刻々に豊かにしている。この間の消息をわれわれは彼の文章を通じてうかがい知るのだが、その文章が近来いよいよ磨きをかけられて、他とまぎれようもない光を加えて来たことは今更ここで説くまでもない。清潔で詩美に富み、柔軟で彈力があつて余情にくゆり、一方また凜乎とした氣概を持ちながら、機知とユーモアとをさりげなく閃めかせるこの串田文章なるものに、一体どんな席を与えたらしいのである。「文は人なり」の諺がここでもよく妥当する。もしも彼にどこかへ坐つてもらわなければならぬとしたら、私はちょっと考えて、さて当然の事のように、「樂しみと遊び」、「わが庭の寓話」、「動物誌と植物標本」、「慰めの音樂」などで代表されるデュアメル文章の隣席を指示するだろう。

そのデュアメルが、ポール・ヴァレリーの仕事机の上に山のように積み重なつた原稿の書きかけを見て、作家の生活を圧迫するこんな攻撃的な重荷のことを非難した時、あの「ヴァリエテ」の作者がえもいえぬ優雅さで微笑しながら、こう答えたそうである。

「僕らは此の種の雑役を投げ出すことはできない。これは世界の一瞬間、フランスの一瞬間だ。こんな事は永久には続かないだろう。辛抱だよ、君。そうして勇気だ！」と。

(『串田孫一隨想集月報』昭33・8 第摩書房)

交友抄

交友について書けと言われば、今の私としては、さしづめ串田孫一さんに登場を願うのがいちばん自然のようと思われる。串田さんの事ならば書きよくもあるし、書いて張り合いもあるし、そこからいかか心の実りが得られるような気がするからである。

そんな事を考えながら、昨夜私は書斎の電蓄で、バッハのフルートとハープシコードのための奏鳴曲口短調を聴いていた。そしてその第一楽章のアレグロから第二楽章のレント・エ・ドルチエを聴いているうちに、わが友串田孫一というこの世での愛する道連れが、その人柄といい、行き方といい、また他人への接し方や話しぶりといい、何とこのフルートという樂器の音色を想わせることかといふ考えに落ちこまざにはいられなかつた。

フルートはその広い音域のなかで常に円く、柔かく、懐かしく、速い曲であれ遅い曲であれ、軽快なものであれ瞑想的なものであれ、いつも空間に晴れやかな軌跡を残しながら行き帰る。この十数年来の串田さんがあたかもこれの軌跡によつて満足させられている。しかし円転とか滑脱とかいうような手垢に染まつた形容は彼の場合当てはまらない。なぜならばこの人間フルートもまた特異の材質から成り、見た目にはただ美しくても実は複雑な機

構を持ち、甘く見てかかつたり、無礼な扱いをしたり、この世的な浅はかな権力をもつて臨んだりすると、あるいはおもむろに、あるいは忽ち、思いもかけない不調和音に、予期しなかつた内部からの手強い抵抗に出会うのである。串田さんはどこかで彼自身のことを、「意地っぱり」とか「つむじ曲がり」とか称していた。しかし私はそれらの言葉を、彼の場合、否定を含んだ微笑無しには受けとらない。そういう通俗な既成語がうまく当てはまる人を私も少なからず知つてはいるが、串田さんは遙かに理性的・知性的・風刺的で、そんなど簡単に秤に乗るような人ではなく、思いつくままに名を挙げれば古くはモンテニュー、新しくはジョルジュ・デュアメールの系列に属する人のように思われる。

私が暗示したり勧めたりする事を大抵の場合串田さんは喜んで採用してくれるが、どうしても初一念やその時的心に染まない事は、結局物柔かに返上してくる。松本から上高地まで久しうぶりにご一緒に車で行きましょうといふ私達夫婦の切々たる勧めを、やっぱり一人で徳本を越えることにしますと言つて、たつた一人の夜道での結飯を作らせると、夕暮れの松本の繁華街を人の世にまぎれこんだどこの天の使いのように、島島行きの電車の乗り場へと急いで行った串田さんである。

その時の彼の後ろ姿。宵こそいよいよ頻繁な自動車や自転車の往来を縫つてゆく串田さん、大学教授で、哲学者で、自然詩人であるわが串田孫一さんの、重いルックサックと登山靴の姿。わけても斜め前さがりにかぶつた古いベレー帽の下からのぞいている幼いような後頭部と首すじ。私はこれを書いている今でもあの寂しい美しさを、昨夜のフルートの音のように懐かしく思い出している。

(一九六五年七月)
『尾崎喜八詩文集』9

○ 尾崎喜八
無題 (ノートより)

ゆうべ久しぶりに串田さんが訪ねて見えて、喜ばされたせいかも知れないが、けさは私の心が珍しくおつとりして和やかだ。あんまりきびしく世の中や周囲のことを考えず、もっぱら自分の仕事への思いに柔かく充実して年齢と閱歴とのおのずからなる重みの中で来る日来る日をそれぞれ意味深い時間に変らせて生きようという気持に、言わば鼓舞され、やされているような気持である。

十三年ほど前に私が翻訳して出版した、モーリス・マーテルリンクの「悦ばしき時」という自然隨筆の本を、串田さんは誰よりもいちばん愛読してくれたが、その中に諸國の庭の日時計と、それに刻まれている銘のことを書いた美しいページがある。マーテルリンクはそういう銘のいくつかを挙げて、「正義の時間は現世の時刻よりは鳴り出でず」とか、「余は光によりてめぐる」とか、「余は花々の中にありて時を告ぐ」とかいうのをわれわれに知らせながら、中でも最も美しいのは、イ

ギリスの文人ハズリットが或る時ヴェニスで発見した「余は晴朗なる時のみを数う」。

そして、あの時間まで話しこんで、夜ふけの電車で遠く小金井へ帰つて行くくらいなら、串田さんもいっそのこと一晩泊つて、けさの此の美しい若葉の朝を、私といっしょに、たとえ一時間でも暮らせばよかつたのにと思つてゐる。白樺が影をえがく縁側で、特別に念を入れたてのコーヒーでもすすつて、ちょうど今朝咲きはじめのライラックの花を眺めたり、私の持ち出すブロックフレーテで、ヘンデルでもテレマンでも聴かしてくれればよかつたのに思つてゐる。晴朗な朝の時間、串田さんにしたつて悪くはあるまいが、私にとってはなおさら無傷な玉のような時間だったに違いない。私もまたバッハのやさしいカンタータぐらいは吹いたことだらう。なぜならば多くの場合、われわれはよく調子が合うのだから……

(昭34頃か?)

○——串田孫——

尾崎さんの山歩き

山歩きの古い記録を、戦争の時に焼失してしまったため、正確な年月日は分らないが、多分昭和四、五年の秋だったと思う。どんなところでも、とも角山みちを歩いていたい時期で、土曜日の午後は殆んど毎週、学校から戻ると、前の晩に用意をしておいた荷物を背負つて、駅へと走つた。

その時は、三峰から雲取へと歩く計画で上野駅へ急いだ。発車間際の列車に乗つて、空いている座席に腰を下ろすと、まん前に河田楨さんが腰かけておられた。私はそれより以前に河田さんに紹介され、中央線の大月の近くのカンバ沢山へ同行させて戴いたことがあるので、この偶然が嬉しかつた。

私は親戚の年上のものと二人だったが、河田さんの方にも一人連れがあつた。それが尾崎喜八さんだつた。中学の二、三年の私を河田さんが何と言つて紹介して下さつたか記憶にないが、小柄な外国人のような尾崎さんに挨拶をすると、急に堅苦しい気分になつた。河田さんは、始終にこにこして私にも何やかやと話しかけたり、また尾崎さんとも極めて気楽に話ををおられたが、私は紹介されたばかりの尾崎さんはどんな話ををしていいものかも分らず、かしこまったく氣分は容易にはぐれてくれなかつた。

後から調べてみると、高井戸での生活から、再び東京の京橋、新川へ移られた頃で、後年尾崎さんはこう書いておられる。「こういう時期にはからずも未知の登山家河田楨氏の『一日二日山の旅』や『静かなる山の旅』を読んで感銘をうけ、やがてその人と相知るに至つたのは天恵だつた。私は彼に案内されて遠近の山へ行くようになり、その紹介で「霧の旅会」という登山団体の会員になつた。失つた武藏野の代りに山岳という一層広大な世界を得、私の詩に文章に山がその実体と霧の匂気とを提供した。登山によつて救われた私

はそこに精神のための新しい支柱を見出し、自然への愛と傾倒とを一層深くした。」

この時、秩父の奥深い山へと、多分淡々とした容子で入つて行かれた二人の大先輩を、合バスの、赤いテールランプを、闇の中に立つて見送つたような気もするが、それはむしろその時の私の気持の、一つの投影かも知れない。

尾崎さんは既に『空と樹木』『高層雲の下』『曠野の火』の詩集をはじめベルリオーズ、ヴィルドラック、ロマン・ロランの訳書をしておられたが、中学生でもあり、詩に対する関心の殆んどなかつた私は、それらの本を手にする機会もなかつた。

だが昭和十年に『山の絵本』が出版された時には、こちらも山に関する本をかなり読み、また文学についての興味も深まって來ていたので、出版される前から予約をして熟読した。私もその頃は一番山に強く牽かれていたし、その仲間には文学好きな者もいたのでこの本からの影響は大きかつた。詩集『旅と滞在』も書架に並んだ。

人を訪ねることには極めて引込み思案の私も、ある夜尾崎さんの井荻のお宅を訪ねた。高須茂さん、勝見勝さんたち数人が集まつておられ、ロマン・ロランの会の話をうかがつた後に、俳句をつづらさせて閉口したのを憶えている。山の話も当然あつた筈なのに、その方の記憶は全く残つていない。

それ以後、二、三度は井荻にお邪魔してい

たが、尾崎さんが私にとつてもつと近い存在になつたのは戦後の富士見時代からである。

八ヶ岳の山麓を歩き、釜無の谷を溯つた。私

も自然の勉強がおもしろくなつて来た頃だったので、一日こうして歩くと、教えられる花や鳥や昆虫などの名前で、私の手帖はいっぱいになるほどだつたし、夜になると星の勉強があり、オルガンとともに多くの歌を聴くといふ。正にその一日がはち切れそうに充実したものだつた。

三、四日の滞在ではあつたが忘れ難くその後も理由をつくっては富士見へ自然の実習に出掛けた。そして野良仕事をしている人たちに謙虚な態度で声をかけ、河原での中食には、流れに李を冷やし、平らな石を選んで、清潔なハンカチをひろげて、テーブルクロースにして、それらすべてが、手まめで行き届いていて、尾崎さんらしい「やり方」であった。

一般に、平素はかなり几帳面な人でも、山に入るとそれが難しくなり、むしろなげやりになり勝ちであるが、尾崎さんの山歩きにはそういう変化の現われが全くなかった。普段でも、私などには到底真似の出来ない、綿密な仕事振りであったが、山道での気の配り方、神経の使い方は一層細やかで、一つの山行から得られたものの数は、有形無形のものを併せて、想像以上だったと思われる。

その獨得の氣質は亡くなる直前まで崩れることがなかつた。

(昭49・2・19)

二十年前の春

串田孫一

今から丁度二十年前、一九五四年の春、角川文庫で尾崎喜八詩集が出ることになり、尾崎さんと角川書店の両方から、解説を書くようという連絡があつた。私は承諾の返事を保留して、二、三日考えた末に、上野毛のお宅へ出掛けた。結局は引受けことになりそ

うだと思いながら、どうも荷が勝ち過ぎているような気がするというと、尾崎さんは、ただ笑いながら、その文庫に入れることに決めた詩の目次を出された。そして既に出版されている創元文庫（昭和二七年）と新潮文庫（昭和二八年）から選ばれた作品には赤点がつき、それ以外の十一篇は、わざわざ解説をする者のために原稿用紙に書き写され、結局それらを私は持ち帰ることになった。

そしてその際に、尾崎さんは、自分の詩について皆んなそれぞれにいいことを言つてくれるので、大切なことを誰も言つてくれないと言われた。否応なしに、新しく出る詩集の解説を書くことになつてしまつた私にとって、これは少々厄介なことになつた。すぐには上げます。

夜家本君來訪、もちろん快く納得して帰つて行きましたが、「自分の勝手ばかりを言ひ出して」と恐縮の面持でした。それで六月の第一日曜を中心にして私達の行く處へ同行することになりましたから、雲取・白岩コースなり、小菅から大菩薩（或いはその逆コース）なりをやってみたいと思いますが、御高見を承りたいと存じます。（以下假名遣い原文通り）

私共夫婦は二十一日出発、二十六日か遅くも二十七日帰京の予定であります。妻はその間の分水荘生活と、塩尻峰見物とを楽しみに

るようにしていました。

それから一ヶ月以上はたつた五月十三日に、遂に尾崎さんを訊ねて、その大切なことを訊ねようと思ったところ、都心へ出掛けられて不在であった。午後早々だつたと思う。日記を見ると、それから駒沢大学へ行つて、「宗教の光と影」という題で講演をしている。

「解説」は気になるばかりで、書きはじめるきっかけがつかめない。「大切なこと」をまず何とかしないと、どうにも考えがまとまらない。次第に気分が窮屈になつて来たところへ尾崎さんから手紙が届いた。

*

してをります。何しら孫子のために自分の時

間も楽しみもすべて犠牲にしてゐるの、此のチャンスは天来の恩寵のやうに思へる

いのです。

宅では三、四種類の薔薇が咲きはじめてみんなを喜ばせてゐます。別にローズマニアに転じたわけでもありませんが、こんなによく咲いてくれるのならといふので、来年はもう五、六種類植ゑこんで、玄関前の初夏をもうと美しくしようと考へてをります。三越のバラ展は見事でした。然し私達の余暇と技術としては、とてもあのやうな花は咲かせ得ないやうです。大して新しい種類でなくとも、ややんと安定した、丈夫なのを、できるだけ立派に咲かせてみたいと意気こんでゐるといふ次第です。

詩集の御解説を楽しみにしてをります。私

の詩に一種のヒューマニズムを見る人はあります、すべての作につきまとつてゐる氣質的な Wehmut を見る人はゐないやうです。実は善いにしる悪いにしる、それが私の書くものの基調なのですが。これを持たずに私を imitieren する時、往往にして單なる独善に陥りゆるゝべ、從來もその例を見るとほりであります。

世田谷も此の三、四日前からハルゼミが鳴きはじめ、多摩の河原にコアジサンの白い帆がひるがへり、夕方から深夜にかけてアオバヅクの声を聞く季節になりました。御一緒する秩父や大菩薩でどんな収穫があるか、それが今から痛烈な楽しみと憧れとになつてゐま

す。

昨夜或る本でいふな一節を読みました。

"The buds of ash, sullen for so long in their coverings shaped like the black hooves of cattle, broke into brown-green sprays. The cuckoo sang all night. Reed-Buntings chattered among the rising green, water-holding stems of balsam; soon Antares would burn dull red in the low southern night sky."

場所が北緯五十一度ぐらゐの地点だと、なんばドアンタレスは南の空低く登ぬといひでせう。そして此の「鈍い赤」は々とじよどむに私としては一脈の Wehmut を感じ取つてしまふのです。御懇察ください。

五月十五日 尾崎喜八

*

そして尾崎さんも亡くなつてしまつた。

(『歴程』尾崎喜八追悼号 昭49)

○ 串田孫

尾崎喜八さんの山と詩

んが女中、私はトウサンになつた。

「解説」は六月七日の夜更けにやつと出来上がった。そして翌日、當時出講していた国学院大学を休講にして、それを尾崎さんのところに持参した。多分仕事中に、飛び込んで行ったためと思うが、少々機嫌が悪く、弱つたことになつたと思うが、「解説」を読んで戴いていると、一、二、三ヶ所で笑い出し、すつかり機嫌もよくなつて、帰える時には上野毛の駅まで下駄穿きで送つて下さつた。

私はこれでほつとして、その原稿を角川書店へ渡した。しかしこの文庫版の尾崎喜八詩集は、それから二十年たつた今も出版されていない。苦労して書いた解説の原稿をもう一度読みたいたと思って時々問い合わせたが、どうなつてしまつたのか、手許には戻つて来ない。

尾崎喜八さんは、講演も勿論であるが、ラジオ放送も余り断られなかつた。N H K の『自然と共に』といふ番組では、その取材のために、録音機を携えた担当の人と何回も一泊三日程度の小旅行をされ、それも山道を正面に歩かれたことが多かつた。それらの放送原稿は、大部分『詩文集』に入つてゐる。

その『自然と共に』とは別に、特別番組と

して昭和四十三年四月二十九日に、「緑のメルヘン」という題の放送があった。夜九時十分から四十五分までの番組であった。「かたくりの花」その他三篇の詩の朗読があり、御自身の歌と笛の演奏が入り、忘れ難い放送であった。花と小鳥と音楽についての話であるが、その途中で、次のように言われた。

「根っからの詩人として自然と音楽の好きな私には、年をとった今でも時どき山や高原へ出かける事と、たまに良い音楽会へ行く事と自分でも下手な歌を少しばかり歌つたり、それよりもっと下手な笛を吹いたりする事が、言わば唯一のリクリエーションです。」

この最初の「根っからの詩人として」という言葉であるが、尾崎さんほど、何一つ照れずに、むしろ誇らしげに自分の名前のみに「詩人」という言葉をつけた人を他に知らない。

これは長い間詩を書いて来られた末の自信ではない。詩人として生涯を貫く決意をされた時に、同時に抱かれた当然の事柄で、そのことは、大正十一年三月十五日の日付で書かれた、第一詩集『空と樹木』の序文の一節を読めば明瞭である。

「たとえ如何なる環境にあっても私は歌う事を第一としたい。自分の岸辺にも同じ青浪の打ち寄せる、同じ日光の輝き、同じ嵐の吹き荒ぶ、静穏と暴風との人生の海を飽くまで歌いたい。その多彩な種々相と、その深遠な思想と、そしてその不死の憧憬に価する未來の水平線こそ私の取扱う主題の一切でなければ

ならない。人間及び詩人としての私の存在理由は、私自身がより強くより正しく生きる事によって歌い、より明らかにより美しく歌う事によって生きるという、この単純で熱烈な要求を実行する事の外にはない。それでこそ私の生存に言訳が立つのである。そして此事は理屈でもなければ空想でもなく、常に私のうちに生きて育つている実感である。」

つまり尾崎さんは詩人として自然を見、詩人として音楽を聴き、また一粒の葡萄も詩人として口に入れ味わえた。そしてまた詩人として山に登られた。その見方、聴き方は綿密で、すべて物に接すれば、何よりもまず科学的に観察し、書物で調べ、顕微鏡や望遠鏡を使って再確認をした上で、それに最も適しい言葉を探し、詩人として表現された。この科学的な過程を必ず経た上で詩人の感覚といふことをはつきり言わないと、詩人の見方は非科学的であるというように受け取られる虞もある。

しかし尾崎さんの多くの自然に関する隨想を見れば、その観察、実験、そして確められた知識の豊かさを容易に知ることが出来る。山旅が始まるのは昭和三年からであるが、それは河田楨さんの『一日二日山の旅』を読んで感銘を受け、後この著者河田さんを知ったことが直接の動機である。大分前のことになるが、尾崎さん、深田久弥さん、それに私も加わって、「山と文学」という題で、その座談をラジオ東京から放送したことがあった。その時も尾崎さんは、自分に山への道を教え

てくれたのは河田楨さんであり、もう一人は長尾宏也さんだと言われたのを憶えている。

山行がはじまり、頻繁に出掛けられるようになると、当然、自然観察の対象も多くなって、特に気象や天体の観測も加わって来た。撮影を続けられた雲の写真集とその解説がアルスから出版されたのは昭和十七年であるが、既に詩集や散文集も多く出版されているにも拘らず、この『雲』によって尾崎さんを気象学の専門家だと思っていた人もかなりいた。尾崎さんの山歩きについては、亡くなられて間もなく、日本山岳会の『山』（昭和四十九年五月号、三四七号）に拙文を載せていた。だいたので重複は避けたい。戦後、ウエストン祭への参加と、その碑前での朗読は、この行事のプログラムの中でも欠かせないものになっていた。その際、上高地で尾崎さんと会って話ををするのを楽しみにしておられた方々の数もかなり多かったし、依頼を受けければ断れずに、深夜、宿の一室で何十枚という色紙に几帳面な文字で詩の一節を書いておられたのを想い出す。そのためどんなに疲れ、憩いの時間が失われたかを察する人は少なかつた。なぜなら、翌朝、その色紙を依頼した人が受け取りに来れば、にこにこと話しながらそれを渡しておられたからである。

私は、尾崎さんと長い山旅をしたことはない。一日二日の、比較的楽な山歩きの経験はあるが、それによって、多くの詩や散文として残されている若い頃の尾崎さんの山旅がどうなであつたかを、かなり細かに想像出来る。

ひと口で言えば、尾崎さんにとって山は常に自然の勉強の場であったと思う。

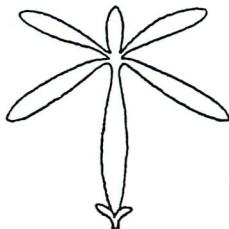
植物をていねいに観察し、既によく知つておられる鳥の声にも耳を傾け、新しい発見を期待された。それらは屢々手帖に書きとめられて、充分の燃焼の後に詩となり、散文になることがあれば、知識として次の観察を一層深いものにする場合もあった。

それは、都会を歩いても、平素の生活の中でも同じことであった。

今、燃焼という言葉を簡単に使つてしまつたが、詩人の言葉に対する態度は当然厳しく、林のヘリで、僅かの風にそよぐ木の葉たちのように軽率であつてはならず、言葉が「ひとつ確かな造形をなすためには、歌の過程に抵抗と撓みとがなくてはならぬ」（「詩術」）と書かれている。

尾崎さんの山には初登攀の記録はない。だが、この詩人にとっては、どんな山行も初登攀であり、すべての日常が初登攀の真の意味を持つていたようにも思える。

（「山岳」昭50・4）



『魂、そのめぐらしいの幸福』（尾崎喜八）より

カット・串田孫一

尾崎喜八への旅

その三

伊藤海彦

詩人尾崎喜八は実にさまざまな面で若い私を導き教えてくれたかけがえのない人であったが、そうした教示をあからさまに口にしたことはほとんどなかった。作品とその作品を創り出すまでの姿勢、そしてまた日常の生き方そのもので喜八はたえず語りかけ、貴重な

ものを私に与えつけたが、直接にこうした方がいいとか、こうすべきだなどと言つたことはない。外国の文学や音楽、あるいは自然についての座談のなかに貴重な教えはいつもさり気ない形でちりばめられ、こぼれていた。だからそれに気づいてどこまで拾いあげるか、取りこむことができるかによってこの詩人から受ける富は変つてくる。今にして思うと、私は詩人のあふれる富を百分の一もうけとつていなかつたような気がする。それというのも私自身に拾いあげる力というか、職人風にいうならこの詩人から盗み吸収する力がなかつたからであろう。それでも今だに記憶にはつきりと残つてゐる富士見時代の喜八の直接的な教え……あるいは指摘がいくつかある。一つはたぶん二度目に水分荘に訪れた時だと思うが、私の作品のある一行についてである。それは文語詩のいささか言葉の遊びと、感性だけにたよつたような童詩風のものばかり書き散らしていた私が、ようやく口語の新らしい形を探りあてた（……と、私は思いこんでいた）作品だった。多分にリルケに影響された作で、生み落したことで人間としての別離が始まるという母親の嘆きをうたつた詩だった。喜八はその中の、どんなに眼前のおまえを抱きしめて、おまえは遠くで揺れている麦の穂にすぎない……という私の比喩の適切でないことを口にした。後にも先にもこうしていわば教師的な教えを口にしたのはこのときだけであった。それ以外はいつも私の稚い作品のいい處、愛すべき所だけをすくいとつ

ては励ましを与えるといった接し方で私のわずかにせよいい部分を少しでものばしてやろうと考えているように思われた。

もう一つ、当時の指摘で印象に残っているのは、ともすれば観念的、抽象的に流れる私に「見たことをきつちりと書くことを練習した方がいい。それを馬鹿にしちゃいけないよ」といった言葉である。その時、正直いって私は「はい」といったもののそれほど大事には思っていないかった。まさに若気のいたり……で翻訳詩の生かじりからくる頭でつかになっていた私は、平明に適確に眼でえらびとった実景を積み重ねることが、なまなかな思想や奇異をてらった表現よりはるかに強い力をもつていることにまだ気づいていなかつた。そうした視線の鍛錬と平明な言葉の恐怖しさによく気づいたのはその富士見時代から二十年近くたった後のことだった。

秋を赤らんだ木々の奥から
ちいさい鐘か　トライアングルの
軽打のように晴れやかに澄んだ
彼らの金属的な声が近づいて来る。

この四行に始まる「林間」は私の最も好きな喜八作品のなかの一つであるが、それはこの作が詩として完璧な美しさをもっていることの他に、私に詩人の住んでいた分水荘をかこんでいた林の姿とあのなつかしい秋を彷彿させるからである。そしてこの詩にはようやく後になって私の思い知ったよく見ることの

積み重ねから得た適確な言葉が、歌う対象の小鳥達の動きを生き生きと鮮やかに描写している。というより描写する言葉がいつか小鳥そのものとなり、林の枝々をとびかっている。

たとえば若い涼しい器用な手が
つれづれの手工に丸めて括った毛糸の球、
煙るような白やコバルトや硫黄いろを
つややかな黒でひきしめた小さい球——
柄長四十雀たけながよそくわ 日雀ひがらのむがれ
波をうつて散りこんで来た。

木々が目ざめ、空間が俄かに立ち上がる。
彼らはもうあらゆる枝にいる。
ほそく掴み、丹念にしらべ、引き出して食
いちぎり、
苛烈に 不敵に 美しく、
懸垂し、飛びうつり、八方に声を放ち、
この林の一角に更に一つの次元をつくる。

しかしやがて先達の鋭い合図の一聲に
無数の小鳥は抛物線をえがいて飛び去った。
そして其のあとに口をあいた秋の明るい空
虚から
再建された静寂の一層深い恍惚がここに
ある。

二聯から三聯にかけての展開の見事さに、
三聯のカラ類の群れの動きを描出する言葉
はいかにも小さい彼らの動きそのもの、リズムをつけて重ね、兀められている。この小鳥の観察記録といつてもいいほどの精密な描写が詩人の心を通して組み立てられていくとき一篇のすぐれた詩に昇華するこの微妙なわざ。実をいうとこの詩を「アルビレオ」誌で最初に見たとき(たぶん三十年以上前だと思うが)いい作品だと心ひかれるものはあつたものの、いま私がくりかえし感じているような驚きはなかつた。巧みな描写だけは思つても、その描写の言葉が単なる描写でなくなつて、たがいに結びあいながら詩に変容していくわば詩人の秘法を本当に理解していなかつたらどう。三好達治は喜八の詩が好きで「二十年の歌」という文章の中でもいくつかの詩をあげては讀えているが、ことにその自然觀察の着実正確精細について力をこめて語つてゐる。そしてこれは「野の搾乳場」という詩の描写についての言だが、「一見平凡のようみえていてそうではない、こうした健全な戦慄こそすばらしい」……と書いている。健全な戦慄とは言い得て妙、いかにも卓越した詩人三好氏の言葉だ。この言葉は尾崎喜八の他の詩作にもすべて当てはまるのではないだろうか。健気に清潔に、そしてひたむきに日常を生きる人間の姿に、ときとして喜八は過度とも思われる愛情を傾け、心からの讃嘆を惜しまなかつた。それがある人々にとつては楽天的と受けとられ、またからかいを含んだ理想主義と評された。だが、それらの人々にはその生真面目さの表面だけしかみえていなかつたのだ。そして健全さの行間にある偉大な

る單純さ……にはついに気づき得なかつたのだろう。

「林間」にうたわれている分水荘前の林はむろんのこと、喜八のともをしての散策のそここで若い私はいくたびも野鳥の姿に出あいその声をきいた。そのたびに私はこの詩人特有の懇切な野外講義をうけたが劣等生の私にはなかなかおぼえられなかつた。四十歳を半ばすぎた頃……というのはその富士見時代から四分の一世紀以上たつた頃から、ようやく私にも何十種かの鳥の姿や声が親しく判るようになつたが当時はまことにたよりないもので詩人はそんな私をあわれむように見たものだつた。よく見る詩人喜八は観察力という意味だけではなく、実際にいい眼をもつていた。二十歳を出たばかりの私の眼より五十年ばかりの詩人の眼は若々しくいつも対象をすばやくとらえるのだった。姿もさることながらそのころ私をなやませたのは鳥の声である。喜八は遠くに轟っている鳥の声を、耳に手をあてながらそれが思いもかけぬ鳥の声だつたり、待ちかねていた旅の鳥のものだつたとき眼を大きくみひらいて実に嬉しそうな表情をした。その貴重な歎びを聞きとれずにはいるあわれな私に喜八はこういつた。

「鳥のね、^声おぼえるんだよ。いいかい？」

建建立され私はその初めての集いに出かけてい

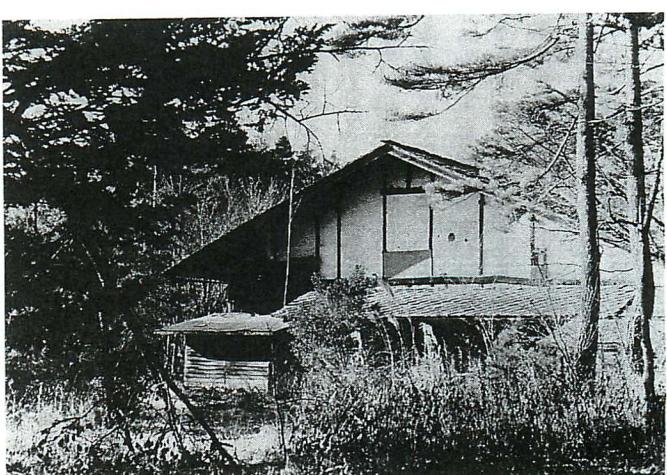
つた。山野も道もあたりの様相は一変して私はとまどっぱかりだつた。分水荘のあつた場所もすぐにはそれと見当もつかず、教えられてその場所に立つてもまだ私の記憶の絵とどうしても重ならなかつた。「林間」の林は往時の生き生きとした表情もなくまばらで、広い舗装道路にはざまれていた。裏側からのぞきこむとかつての家屋の残骸がわずかにみえたが、それとても私の記憶につながらず見知らぬ朽ちた廃材でしかなかつた。

そのとき、茫然としてる私に「鳥のね、聲音をおぼえるんだよ、いいかい?」という詩人の声が突如として蘇つた。だが、鳥ならぬなつかしい詩人の聲音はたちまちに通りすぎる車の音にかき消されてしまつた。

『自註 富士見高原詩集』に収められた「林間」の詩に付した文章で、喜八はこの詩の終聯についてこう書いている。

「……そして美しくて賑やかな彼らがいつの間にかさつと姿を消してしまふと、急にあたりがしんとして、取り戻された静寂がそこにまた新しい空間を築き直すのである。あたかもアレグロ・アッサイの第一楽章が鳴り止んで、徐ろにアダージョの第二楽章が始まることに」

この小鳥たちのように愛らしい騒々しさとはまるで異つたものではあつたが、嵐のすぎ去つたあとに新らしく築かれた静寂——昭和の二十年代はやがて詩人にとつて輝かしい樂章となつて実ることになつたのである。



林の中の分水荘（中山政市氏・撮影）

きあげは	『博物誌隨想』創文社	アルビレオ会	「東京新聞」昭30・	尾崎喜八作品選録の串田孫一編集『選集』
伊吹麝香草	『同右』	デュアメル・尾崎喜八訳『わが庭の寓話 動物譚と植物誌』(書評) 「図書新聞」昭38・11・2	10・31	「忘れ得ぬ山 第二」 筑摩書房
博物日記	『博物誌IV』社会思想社	串田孫一・町田立穂対談「御時間拝借」 「ハイカー」昭31・12	串田孫一・深田久弥編『山のABC』	クリティクス
冬の記録(益一書)	『同右』	「ハイカー」昭31・12	（1・2・3） 創文社	『博物誌』知性社
山麓の村	『博物誌』知性社	あとがき 尾崎他共著『自然手帖』 雪華社	山麓の村	『幸福をめぐる断想』三
笠書房	『幸福をめぐる断想』三	後記 河田楨著『緑の斜面』青城書房	後記 河田楨著『緑の斜面』青城書房	『博物誌』知性社
郷愁列車	『霧と星の歌』朋文堂	白樺の葉について 尾崎喜八著『草稿詩集 花咲ける孤独』四季書館	白樺の葉について 尾崎喜八著『草稿詩集 花咲ける孤独』四季書館	『博物誌』知性社
八ヶ岳の見える旅	『山のパンセ』	登山者と山の本『追憶の山』スキーバージャーナル	登山者と山の本『追憶の山』スキーバージャーナル	『博物誌』知性社
之日本社	『山のパンセ』	山と詩人『同右』	山と詩人『同右』	『博物誌』知性社
島々谷の朝	『同右』	『自註 富士見高原詩集』について	『自註 富士見高原詩集』について	『博物誌』知性社
島々谷の朝	『同右』	『尾崎喜八詩碑建立記念誌』	『尾崎喜八詩碑建立記念誌』	『博物誌』知性社
雲の多い麓の旅	『同右』	埋もれかけの木の実『尾崎喜八資料』創刊号	埋もれかけの木の実『尾崎喜八資料』創刊号	『博物誌』知性社
釜無山	『墓色の時間』創文社	駄鳥の失策『同右』9号	駄鳥の失策『同右』9号	『博物誌』知性社
不安の夏(益一)	『猫と詩と颶風』	尾崎喜八「人と作品」・『解説』	尾崎喜八「人と作品」・『解説』	『博物誌』知性社
東都書房	『東の春のはじめ(益一)』『同右』	本詩人全集23』新潮社	本詩人全集23』新潮社	『博物誌』知性社
西風の歌	『夜空の琴』創文社	「解説」と編集『尾崎喜八詩集』	「解説」と編集『尾崎喜八詩集』	『博物誌』知性社
自然との対話のための記録	『Eの糸切れたり』時事通信社	世界の詩54』弥生書房	世界の詩54』弥生書房	『博物誌』知性社
村のもじびールポルタージュ	『婦人公論』昭27・10	尾崎喜八『山の絵本』『新選覆刻日本山岳名著解題』大修館、串田孫一著『山と別れる峠』実業之日本社	尾崎喜八『山の絵本』『新選覆刻日本山岳名著解題』大修館、串田孫一著『山と別れる峠』実業之日本社	『博物誌』知性社
「図書新聞」昭27・1・1	『図書新聞』昭27・1・1	『詩集 花咲ける孤独』(昭30)『詩集歳月の歌』(昭33)『尾崎喜八詩文集1~10巻』(昭33~50) デュアル	『詩集 花咲ける孤独』(昭30)『詩集歳月の歌』(昭33)『尾崎喜八詩文集1~10巻』(昭33~50) デュアル	『博物誌』知性社
新刊図書室—尾崎喜八詩集(創元社)	『婦人公論』昭27・10	アメル・尾崎喜八訳『わが庭の寓話』動物譚と植物誌』(昭38)『さざなみの泉』(昭39)『ヘッセ・尾崎喜八』河田楨・峠と高原『新ハイキング』	アメル・尾崎喜八訳『わが庭の寓話』動物譚と植物誌』(昭38)『さざなみの泉』(昭39)『ヘッセ・尾崎喜八』河田楨・峠と高原『新ハイキング』	『博物誌』知性社
私の読書遍歴	『日本読書新聞』昭29・7・12	解説 尾崎喜八著『山の絵本』(岩波文庫) 岩波書店	解説 尾崎喜八著『山の絵本』(岩波文庫) 岩波書店	『博物誌』知性社
再び巻末に	『串田孫一編『忘れ得ぬ山第二巻』筑摩書房』付録	二十年前の春『歴程』昭49・4・5	二十年前の春『歴程』昭49・4・5	『博物誌』知性社
新しい共鳴	第三	合併号尾崎喜八特集	合併号尾崎喜八特集	『博物誌』知性社
わたしの教師	「N.H.K.」昭36・12	尾崎さんの山歩き『会報』日本山岳会昭49・5	尾崎さんの山歩き『会報』日本山岳会昭49・5	『博物誌』知性社
「山岳」昭50・4	尾崎喜八さん(五六~七四)の山と詩	河田楨著『緑の斜面』青城書房	河田楨著『緑の斜面』青城書房	『博物誌』知性社
25号	「山岳」昭50・4	「べートーヴェン」(昭62)	「べートーヴェン」(昭62)	『博物誌』知性社

- 矢内原伊作・アルビレオの会 「日 本経済新聞」昭47・5・20 哲学者の串田孫一さん(インタビュー) 「朝日ジャーナル」平2・6・22号 島崎敏樹・『山のABC』(書評) 「週間読書人」昭35・2・22 曽宮一念・『山のABC 2』(書評) 『同右』昭38・1・28 小原秀雄・『自然手帖』(書評) 「図書新聞」昭44・3・1 伊藤和明・忘れぬ旅の日々 「アルプ」昭49・6 三宅修・七国峠 「アルプ」昭49・6 島崎敏樹・金色の肌の小笛 「アルプ」昭49・6 岡本寛志・忘れていた笛の音 「アルプ」昭55・10 「古楽は語る 14」(副島頭一記者) 「読売新聞」平1・4・13(夕) 編集室から 「アルプ」創刊号 昭33・3 アルプ創刊 「信濃毎日新聞」昭33・3 望月達夫・雑誌アルプ 「会報」日 本山岳会 昭33・8 串田孫一・「アルプ」創刊準備の頃 「アルプ」昭53・3 三宅修・アルプ二〇年の風土 「アルプ」昭53・3

付 記

〔凡例

- この資料一覧は、尾崎喜八と串田孫一との四十余年に及んだ交流関係を知る参考資料の集録である。

- 山男の心とらえ二〇年一月刊誌『アルプ』「朝日新聞」昭53・4・3 三宅修・アルプタ映え—三〇〇冊の青春 「アルプ」昭58・2 串田孫一・遠い未来の山人に 「アルプ」昭58・2 編集室から 「アルプ」三〇〇号 昭58・2 さわやかに勇退——山の月刊誌「アルプ」 「毎日新聞」昭58・1・24 点描・「アルプ」二五年の終刊 「朝日新聞」昭58・1・28(夕) 『アルプ』消える 「図書新聞」昭58・2・12 串田孫一・雑誌を終わらせることが 「東京新聞」昭58・3・5(夕) 三宅修・三本の軌跡 『日本山岳名著全集 7』あかね書房 小海永二・解説 『串田孫一断想集 3』大和書房 小海永二・解説 『串田孫一断想集 2』大和書房 小川和佑・戦後時代思潮と「アルビレオ」 『リトル・マガジン発掘』笠間書院 田中清光・山にむかう文脈 串田孫一著『詩集 山』文京書房

- 尾崎、串田の両者と共に、第三者からみた関連資料も加えて三部構成として、多面的な把握を試みた。
 ●資料は書誌が主体であり、記録的な写真、映像、音声等の殆どは含まれていない。
 ●資料の書誌的記載は、紙面上、出典を知る最小限に省略した。
 ●出典は、基本的に単行図書から採録した。尾崎に於ては『尾崎喜八詩文集全十巻』を第一次とした。
 ●改版、新装等、異本のあるものは初版を示した。尚、全集または予約購入等の特殊刊行本に収録され、後に通常單行本に採録されたものは、その図書も併記した。
 (二) 「交流資料」は、「出会い」「富士見・再会」「雑誌『アルプ』」「尾崎喜八詩文集」共同編集等の項目に、大きく分けることができる。
 二人の交流が、より親密に豊かに伸展し、共通の業績をあげるようになるのは戦後の「富士見・再会」からである。これらの資料はかなり集めることができ、又、知る人も多くなる。しかし、「出会い」から始まる戦前のことは、二人の接触の浅さにもよるが余り知られていない。この点に関して、本号に掲載されている串田の「尾崎さんの山歩き」や新潮社版『日本詩人全集23』収録の「尾崎喜八・人と作品」の記述は、尾崎年譜をまとめる上でも数少ない資料である。

●尾崎、串田の両者と共に、第三者は、昭和四、五年のこととで、当時は、串田は山歩きを始めたばかりの中学二、三年生、尾崎は詩集『旅と滞在』と第一隨想集『山の繪本』の新領域を開拓させていた。一方、時代は、都市文明と共に市民文化が發達し、登山や自然観察等に新しい広がりを拓いていたのである。この二人をとりまく状況は、後年、この国では独特の知性的な自然文学を二人の間で結実させていく胚芽になつた、と編者はみている。
 二人の本格的な交流は「富士見・再会」からであることは、前にも述べた。又、前掲の「特集・編集付記」にもその意義の重さが述べられている。本号に掲載された各資料は、総てではないが、二人の交流の本質的なところは十分に明かしている、と思う。

尾崎喜八、串田孫一による業績の評価や意義がどのように位置づけられ認められるかは、今後改めて検討されるに違いない。この資料群がその考察の一助になればと思つてゐる。

最後に、串田は尾崎の告別式で式に當り、又、明月院の墓銘を揮毫した事も書き加えておく。

(敬称略)

でき」と

など、展示企画の根本的な変更であった。
その詳細な報告は次号に譲るが、これまで、

第九号は通常の年一度の刊行とは異なり、前号から半年も経ていないので、「この一年のでき」とは次号に掲載することとし、ここでは、富士見町から六月二十五日に報告された「自然と文学の森」の展示計画について、簡単にお知らせしたい。(詳細は第一〇号にて)

六月半ばになつて富士見町教育委員会から尾崎遺族に面談の申し入れがあつた。植松次長、北村学芸員が富士見尾崎会の名取正人氏を伴つて尾崎宅に来訪された。折から尾崎実子は白内障の手術のために入院中であり、尾崎栄子と石黒が応接し、お話を受けたが、内容は、展示計画の大きな変更と、それに伴う尾崎の展示規模の縮小であつた。

今年初めまでの進行状況は、第八号「富士見町尾崎記念施設の進行について」でお知らせしたようにコミュニティプラザの二階部分三〇〇坪を尾崎の記念施設とし、そこに尾崎遺族および尾崎研究会・記念施設企画委員会で提案した展示計画を反映した形で施設が作られる方向に、大幅な変更は見られなかつた。しかしこの度の突然の来訪において示された内容は、

①展示面積を約四分の一に縮小

②他の富士見に滞在した文学者の展示との同居

③それまでの企画案にはなかつた映像展示

の導入

合のある度に、富士見町教委に逐一進行状況を確認し、それに基づいて会員諸氏にお知らせし続けてきた遺族としては、このような大きな改変が短期間に、まったく遺族への報告もなしに進められていたことに対してもかなり驚いている。また、これまでわたくし共を経由して進行状況の報告を受け、それを信頼してくださっていた会員の方々、とりわけ企画委員会でご尽力くださった方々には、寝耳に水のこのようない報告をしなければならないことを、わたくし共も残念に思っている。いずれにしても今後は、展示内容においても同様の「突然の改変」がないように、注意を払いつつ進行を見守りたいと思う。(石黒敦彦)

編集室から

十六頁に掲載した「天気図リーフ」は、串田さんの品のよい簡潔な図案と、喜八が万年筆で細かく書き込んだ文字が相俟つて、見てみると一枚一枚が美しい「スケッチ」であるような気持ちを起こさせます。そうした気持ちちは誰も同じらしく、原団をお見せした方々から「これはこのまま本にしたいくらいだ」というご感想をいただくことがあります。そうした思いが通じたのか、研究会員でいつも喜八の放送・録画などのテープ起こしを手伝つてくださっている石田一二三夫さんが、原団

のコピーを使って一冊の「本」として装丁してくださいました。『分水荘の森—気象観測と日記』という題の、創文社版の詩集『田舎のモーツアルト』などと同じ判型の布地張り、角背の立派なもので、本文は喜八が細かい文字で記した日記をワードプロセッサで起こしたもので、十六頁の図が原寸ですから、判読するにも根気がいります。今回の日記の部分はこの本(尾崎家と石田さんとの限定五部だけの)から活字にしました。

さて、研究会員諸氏のお力添えを得て、この「資料」も次号でどうとう一〇号を数えることができます。それがちょうど喜八の「没後二十年」に当たります。そこで次号には一〇号分の「総目録」を付けることにいたしました。また、編集部と嘉納忠明氏とで相談した結果、次号は喜八の未刊行の「訳詩」を特集しようと企画しております。雑誌掲載のみでついに刊行されなかつたものを中心に紹介しますが、その他訳詩で、活字になる機会を失つていた草稿なども掲載する予定です。ご期待ください。

(石黒敦彦)

尾崎喜八資料・第九号
一九九三年十月三十日発行・非売品
ISSN 0911-3339

発行 尾崎喜八研究会

鎌倉市山ノ内一九七一五一(平24)
電話 ○四六七一二三一一七六一

振替 横浜7-33012尾崎喜八研究会
印刷 住友出版印刷株式会社